

---

# 高校生の異世界生活

Galatea

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校生の異世界生活

### 【Nコード】

N7773T

### 【作者名】

Galatea

### 【あらすじ】

異世界に行ってしまった。田崎真哉<sup>たけのみま</sup>は異世界で生活するためにいろんな場所を巡る。主人公最強です。最強系が苦手な方は読まない方が良いです。

## 1話（前書き）

初めての作品です。

自分ではオリジナル作品とっていますが、似ている作品があったら言ってお下さい、自分のを変更か削除しますので。

色々未熟な所がありますが、宜しくお願いします。

## 1話

いきなりだが、俺は困惑している。何故かと言うと目を開けたら、目の前一杯に森が広がっていたからだ。

「どうなってんだ？」

何故俺は此処に居るんだ？

確か、いつもの様に学校に登校するところで変な石を見つけて、気になったので拾って見てみると握りこぶしぐらいのシャボン玉のような石だった。

その石が一瞬光ったかと思ったら、突然浮かび上がって凄い速さで俺の体の中に入っていった。

そのあと、すぐに体の中が燃えるように熱くなり意識が朦朧としてきた。

「何が…おき…て…るん…だ。」

そこで、意識が無くなった。

「そうだ変な石が俺の体の中に入ってきたんだ。」

服を脱いで確認するが、

何処にも異常は無かった。何でだ？確かに変な石が俺の体の中に入

つたはずなのに  
とりあえず、服を来て辺りを見るが、森しか無い。

「どうしよう?」

辺りを見ても森しかないし、此処は何処の森か分からないから歩きながらかんがえるか

考えてる途中で、あることに気付く、

「つ、月が2つ?」

おいおい、嘘だろ地球に月が2つも無いぞ、此処はまさか異世界なのか?

気付けば走っていた、不安で不安で一杯だった。

俺は走りながら泣いた。

自分はこの異世界で独りなのだと、家族も友人も知り合いも居ない。

石につまずいて、転んでも涙が止まらない。

何で、何で俺がこんな目に合っんだよ。

泣きながら思っていると、

「大丈夫ですか?」

誰かが話し掛けてきた。「だ、誰?」

辺りを見回すが、誰も居ない。

「此処だよ。」

今度は、左耳の近くから声が、聞こえて来た。  
左を向くと、そこには

「こんばんは」

薄緑色の羽根が生えた小さな小人が居た。

## 1 話（後書き）

作品を読んで下さって、ありがとうございます。

## 2話（前書き）

前回より長めです。



## 2話

「き、君は誰!？」

「私? 私は風の妖精だよ。」

「風の妖精?」

「そう、風を操るから風の妖精。」

風を操る? どうやって? まさか、魔法?

「どうやって操るんだ?」

「魔法で操るんだよ。」

やっぱり魔法か、でももしかしたら…

「その、風の魔法見せてくれるか?」

「良いよ、じゃああの岩を切るからよく見てるんだよ。」

岩? 岩ってあの巨大な岩の事か!?

月を背にして前方40M先に、高さ約8M横6Mぐらいの巨大な岩があった。

「いっくよー、ウィンドカッター」  
シュッ

短い音がして、横三日月状の塵気楼が巨大な岩を通り過ぎて行った。

岩を通り過ぎた直後に、

岩の真ん中から亀裂が入り岩がゆっくり滑り落ちた。ドシンッ  
ッ

パサパサパサ

チーチーチー

岩の落ちた衝撃が凄まじく、森の鳥達が慌てて飛び去っていった。

「す、凄いな」

確かに凄いが、同時に怖いと思った。呪文一つであの巨大な岩が真  
っ二つになったのだ。出来るだけ人には、撃ちたく無いな。

「凄いなー？子供でも出来るし、見たこともあるんだよ？」

「えっ？」

何て答えれば良いんだ？

疑われると、思うがこれしか無い。

「どうしたの？」

「実は、俺記憶が無いんだ。」

「えっ？そなの？自分の事や、この世界の事覚えて無いの？」

「う、うん自分の名前以外覚えて無いんだ。」

「そうなんだ…君の名前は？私は風の妖精シルフィーだよ。」

「田崎真哉だけど、信じてくれるの？」

「うん、信じるよ。」

「あ、ありがとう。」 罪悪感があるけど、いつか本当の事を話そう。

「ねえ、マサヤって呼んで良い？」

「い、良いぜ俺もシルフィーって呼ぶぞ？」  
いきなり下の名前！？まあ良いか。

「うん、良いよ。」

「ねえ、マサヤ」

「何？どうしたの？」

「私と、契約しない？」

「け、契約！？」

## 2 話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

### 3 話（前書き）

前回より長いです。

### 3話

「そう、契約」

「契約すると、どうなるんだ？」

「契約すると、代償が取られたりするのかな？」

「契約すると、私の場合は風の魔法の威力が上がるし使いやすくなるよ。」

「私の場合？」

「そう、私の場合は風の魔法が得意だから風が使いやすくなったり威力が上がる。だけど、契約する者や種族によって違うんだよ。もし、水が得意なら水が使いやすくなったり威力が上がるし、武器が得意だったり格闘が得意だと武器が使いやすくなったり、格闘が上手くなるんだよ。」

「代償を取られる事ってあるのか？」

「あるにはあるよ、例えば戦って勝ったら契約出来るけど、負けたら何かを取られたりする。後は欲しがつてる物をあげれば契約出来る者も居るよ。」「色んな種族が居るんだな。」

「うん、それで契約の事なんだけど契約しても大丈夫？」

「良いけど、俺契約の仕方分からないぜ？」

「どうすれば良いんだ？ゲームや小説、漫画での契約は呪文か魔力が必要だった筈。」

「魔方陣の中に入れば分かるから、大丈夫なんだよ。」

「そ、そうなんだ」

それでもやっぱり不安だな、出来るだけ頑張ってみるか。

「よし、出来た。」

「えっ何が？」

「魔方陣だよ、契約にはこの中に入って行っただよ。」

なんだこれ？

そこには、二重の丸があり中の丸には六芒星で、外側の丸には英語に似ている文字があった。

「儀式用の魔方陣？」知らない筈なのに意味や文字が読める。何故だ？まさか…あの変な石のせいかな？「分かるの？」

「えっ？まあ、なんとなく分かる。」

やば、声に出しちゃった。

「へえー、人間に読める人は居ない筈なんだけど、でも読めるって事は凄い事何だよ。」

「そうなのか？」

「うん、人間は魔方陣は書けるけど、意味や文字が読めないんだよ。」

「

「そうなんだ…人間以外は読めるのか？」  
あまり口に出さない用にしないとやばいな。

「読めるけど、読めたり書ける者はあまり居ないんだよ。」

「どれぐらいの種族が書けたり読めるんだ？」

「書けるのは、種族のトップクラスぐらいかな？読めるのは、上位、中位ぐらいだよ。もし、種族が100万いるとする書けるのは10人で、読めるのが20万人ぐらいだよ。」

書ける奴少ないな。まてよじゃあ、書けるシルフィーは？

「じゃあさ、何でシルフィーは書けるんだ？」

「私？私はねえー、妖精のトップだからだよ。」

「ほ、本当にか？」

嘘なら、動揺する筈。

「本当だよ。」

あれ？動揺しない本当なのかな？試しに言ってみるか  
「小さいの？」

「ち、小さく無いんだよ。よ、妖精は皆わ、私ぐらいだよ。」

動揺してる。多分妖精の皆に言われた事があって、気にしているの  
だろう。



「擬人化すれば、私だって」

「擬人化？」

「人に変身するんだよ。擬人化して人間の村や街に住んでる種族もいるんだよ。」

狐や狸みたいに化けるのか？

「狐や狸みたいに化けるのか？やっぱり、魔法で？」

「狐、狸？なにそれ？擬人化は魔法しか、無いんだよ？」

この世界では、狐や狸が居ないのか？まあ異世界だからな。

「それじゃあ、いつくよー、えい。」

ピカー

「うわ、眩し！？」

眩しいけど、その前に呪文言ってないよな？

「やったー、大成功。」

「幼女？」

パチパチ ゴシゴシ

瞬きしたり、目を擦ったがやっぱり、目の前には10歳ぐらいの幼女が居た。

「ねえ見てみて、成功した…よ。」

「ど、どうした？」

「マ……ヤ……が……い。」

「えっ？何？よく聞こえないよ？」

「マサヤの方がでかいって、言ったの……！」

「み、耳が痛い。」

「どうしよう？何て言えば良いんだ？」

「うわーん、何で私は小さいんだよ。」

「やばい泣いてる。ど、どうしよう？とりあえず、慰めるか。  
ポン

「えっ？」

「だ、大丈夫だって、いつか大きくなれるよ。」

「慰め用として、つい頭を撫でたけど大丈夫かな？」

「ほ、本当？」

「なれると思うよ、妖精のトップなんだろ？」

「うん、あり……が……とう。」

「スースー」

「寝たか？」

「やべえーよ、俺超恥ずかしい事言っちゃったし、頭まで撫でちゃったよ。出来ればもうやりたくないな。」

「俺も寝よ。」  
「明日は良い一日になりますように。」

### 3 話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

#### 4 話（前書き）

変な所があるかもしれませんが、初心者ですので許して下さい。

## 4話

チュン チュンチュン

「う、うん？朝か、あれ？何で俺こんな所で寝てるんだ？」  
スースー

「寝息？」

俺は左を見て何故こんな所で寝ているかを思い出した。

「そうか、俺は異世界に居るんだよな。」

夢だったら良かったんだけどな。でも、地球に帰っても親は、小さい頃に交通事故で天国に逝ったし心残りがあるのは友人と、もう遊べない事と俺を引き取ってくれた、おじさんを地球に残して来た事だな。おじさん、俺にいろんな事教えてくれたよな！。武术も教えてくれたな。柔道、空手、合気道、剣道、棒術まで幅広く教えてくれて、この世界で役立つと思うから感謝しないとな。

「おじさん、前言ってくれたよね、自分の道は自分で決めろって、だから俺この世界で頑張ってみようと思う。おじさん、今までありがとう。」グギュルル

「腹へったな、食べられる物探してくるか」

遠くに行くと、迷いそうだから少し歩いて無かったら、シルフィーを起こして一緒に探すか。

「昨日切った岩を目印にして、何か探すか。」

見渡す限り木しか無いから、木の実を探すとするか。

歩いて一時間

木を見ている時に気がついた…

「太陽も2つあるんだな。」

歩き続けて二時間

「やっと見付けた。」

見付けたのは良いんだけど、全然疲れて無いんだよな何でだ？高校や中学の時に部活はやってないし、おじさんに武術を教えて貰ってただけだから、体力には自信あるけど、流石にここまで体力が持つ自信は無いぞ。

心当たりがあるのは…

「やっぱり、あの変な石だよな」

まあ良いか。今は困ってないし、後で考えよ。

それよりも、今は木の実をどうやって取るかを考えるか。

「うーん、木を登りたいけど足を引つ掛ける場所が無いからなー、あつそくだ魔法があるじゃん。」

だけど、上手に出来るかな？まあ物は試した、呪文はシルフィーが昨日やったので良いのか？確か…

「ウィンドカッター」あれ？何も起きないぞ、呪文は合ってる筈なんだけど何か足りないのか？足りないとしたら多分…イメージ、か？試して見よう、じゃあ、シルフィーのやった魔法を思い出して…確か三日月状の塵気楼だったから、それをイメージして…よし

「ウィンドカッター」  
シュッ

昨日と同じように短い音がして、木の実と木を通りすぎていった。

木がゆっくりマサヤに向かって滑り落ちてきた。

ズシン

「あ、危なかったー」

もう少して、当たるところだったな、魔法を使う時はもっと気をつけないとやばいな。

「少し失敗はしたが、これで食べ物は確保したな。」  
そろそろ、シルフィーの所に戻ろう。

歩いて一時間した所で、奥の草が揺れた。  
ガサガサガサ

「何だ？」

俺は、咄嗟に身構えた

身構えた直後に何かが飛び出してきた。



#### 4 話（後書き）

読んで下さって、ありがとうございます。

## 5話（前書き）

戦闘シーンを書いてみました。全然上手くありませんが許して下さい。

## 5話

ガルルルル

「狼？いや、異世界だから魔獣か？」

目の前に狼に似てる魔獣？が敵意剥き出しで俺を睨んでいる。

ガウツ

魔物が俺に飛び込んで来たのだが、物凄く遅い。これも変な石の影響なのか？だが、今はありがたい。

俺は飛び込んだままの体勢でいる魔物の横に移動し…「はっ！！」  
魔物の背中に3割の力で踵落としを当てたら…

ギャン

ドガーーンツツ

地面に1メートルのクレーターがありクレーターを中心に直径約5メートルの蜘蛛の巣状のひび割れが出来ていた。

「おいおい、まじかよ力の半分も出していないのに地面にクレーターが出来るのかよ。」これは、力を加減しないと本気でまずい事になるな。

「とりあえず、シルフィーの所に戻ってから考えよ。」

そのまま、歩き続けていると…

「お、いたいたおーいシルフィー、シルフィー？」  
スースー

「よく寝てられるな、凄くでかい音がした筈なんだけどな。」

起きるまで、力の加減を練習しとくか。何か無いかなー…

よし、あの石で試して見るか。

「ふん!!」

あれ? 思いつきり握って見ても碎けない… そうだ、意識しながら握れば碎ける筈。

1 割

ガリン

1 割で碎けたな… じゃあ何時もは力をOFFにしといて、力を出す時には何割かを意識しとけば大丈夫か? 試して見るか。

OFF

「よし、握っても碎けない。」

2 割

ガリガリ

「粉々になったな。」

力の加減は大丈夫だな。

「う、うん?」

「起きたか?」

「うん、起きたんだよ」

キュルルル

「腹、減ったか?」

「う、うん」

「これで良いか? さっき、取ってきたんだが…」

でも、食べられるのか？形はリンゴに似ているんだよな。

「あつベリーの実だ。」

「食べられるのか？」

「うん、ベリーの実は甘酸っぱくて、美味しいんだよ。」

「へえ、美味そうだな。」

食べて見るか…

「待って、皮には少し毒があるから剥いた方が良くないんだよ。まじかよ、あつぶねえ」

「さ、先に言ってくれよ。」

「記憶が無いのを忘れていたんだよ。だけど、毒って言うても少し痺れる位なんだよ。」

「ナイフ、持ってるか？」

「持っていないんだよ。何で？」

「持っていないのか…」

「ベリーの実の皮を剥くのに必要だから。」

「魔法で剥けるんだよ。」

「また魔法か…」

「どうやって？」

「見てるんだよ、風よ」

シルフィーの右手の指先に風が集まってるけど…

「それで、剥けるのか？」

「うん、風を指先に集めてナイフの代わりにしているんだよ。」

へえ、凄いな… そうだ、魔法を教えて貰おう。

「シルフィー、食ってるのに悪いんだが俺に魔法を教えて欲しいんだ。」

「うーん」

「無理なのか？」

「違うんだよ、でも…」

どうしたんだ？

「私はイメージでやってるから、何て言えば良いか分からないんだよ？」

「なるほど。」

魔法はイメージか… 一様は、合ってたな。

「あと、違う妖精に聞いたんだけど…」

「何を？」

「人間はイメージが出来ないから呪文で補ってるらしいんだよ。だけど、呪文何ておまけに過ぎないんだよ」

「そうなのか？」

呪文がおまけって、イメージ凄いな。 「うん、割合にするなら呪文

「1割イメージ9割だよ。」

本当にイメージって凄いな。俺はありがたい、少ないけどゲームや漫画、小説で見たり、想像した事があるからな。

「まずは、これで試すか。」俺は左手でベリーの実を持って、右手の人差し指に風が集まってるイメージをする。

「出来たけど、人差し指に風が纏っただけ？」

「イメージで出来た人間は居ない筈なんだけど…イメージが出来ただけでも凄いんだよ。」

最初に何て言っただ？」

「何か、足りないのか？」

「風を集めるだけじゃ無くて鋭くすれば良いんだと思うんだよ。」

そうか、風で包丁やカッターの様に鋭いイメージをすれば良いのか。

「サンキュー」

「サ、サンキュー？」

やべ

「あ、ありがとう。」

「？」

英語は通じないみたいだな。

## 5 話（後書き）

変な所があつたかもしれませんが許して下さい。



## 6話（前書き）

文才が欲しい。

## 6話

右手の人差し指に日本刀の様に鋭い風をイメージ、すると…

「出来た、さつきと違って風が細かいし、ナイフの様な形になってる。」

「本当に切れるのか？試せる物は…木で試すか。」

「何処に行くの？」

「この風で本当に切れるのかを木で試す。」

俺は右手の人差し指を見せながら木の方へ歩く。

よし、まずは刺してみるか。

俺は人差し指を木に刺したが、刺した感じがしない、切れないのか？右手を下ろしながら考えていると…

ミシミシミシ

バギツツ

いきなり木が割れた。

「切れ味凄いな…何をイメージしたの？」

日本刀は知らない筈だから…

「え、えつと剣の様に鋭いのをイメージした。」

「でも、この切れ味は名剣並みだよ…イメージが上手いんだね。」

「う、うんありがとう」

勘違いしてくれて助かった。でも本当に切れ味が凄い木の切った所がサラサラしてる。切れる事は分かったから、ベリーの実の皮を剥くか。

俺は左手にベリーの实を持って、回転させながら丸く切っていく。

「切るの上手だね。」

「ありがとう」

おじさんは家庭面が駄目だったから、毎日俺が家の事をしていたから掃除、洗濯、料理には自信がある。

「いただきまーす。」

シャリツシャリ

美味しいな。食感や味はリンゴに似ているし、噛む事に果汁が出てくる。

「美味しい。」

「だよね、私はベリーの实大好きなんだよ。」

「じゃあ、もう一個やるよ。」

「良いの?」

「良いぜ、そのかわり魔法を教えて欲しい。」

「良いけど、私も詳しくは知らないよ?」

「それでも教えて欲しい。」

「分かった」

「文字は読める?」

「多分。」

シルフィーは浮かんで何かを書き始めた。

「これは読める？」

見たこと無い文字なのに、読める。

「私は誰ですか？」

「読めるみたいだね。魔法の何が知りたいの？」

魔法のことを色々教えて欲しいけどまずは…

「魔法の使い方を具体的に教えて欲しい。」

「分かった。だけど、今から話す事は、仲間達に聞いた事があるだけだから本当か嘘かは分からないんだよ？」

「大丈夫だが、文字が読めるのとの関係があるのか？」

俺にしたら、異世界の文字を読めるって確認出来たから良かったが…

「うん、もし言葉で理解しにくかったら絵や図を書こうかなって。」

「そうか、ありがとう。」

「いえいえ、じゃあ説明するよ。あと、説明が終わったら契約するからね？」

「  
了  
解  
」

## 6 話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

## 7話（前書き）

物語が進んで無い気がする。

## 7話

「まずは私達、者の魔法を説明…」

「まった、者って誰？」

「人間意外の種族だよ。」

「何で分けるんだ？」

「それは…人間と一緒にされるのが嫌な種族が沢山いて、殆んどの種族は者って言うてるんだよ」

「じゃあ、シルフィーは…？」

「シルフィーは？」

「私も人間は嫌い。」

「何で？」

「私達者は、感覚的に分かるんだよ。例えば、この人はいい人、悪い人とかがね。」

「俺はどっち何だろう？」

「じゃあ、何で俺と契約するなんて言っただ？」

「さっき私達者は、感覚的に分かるって言ったよね？」



「ああ、確かに言ったな。」

「だけどね、マサヤには感覚的に分からないんだよ。」

「どうゆう事だ…？」

「俺が、変なのか？」

「違うよただ、マサヤの近くに居ると安心出来る気がするんだよ。」

「安心ねえ…」

「まあ良いか。」

「それじゃあ、説明に戻るよ？」

「おう。」

「私達者の魔法は大気中の魔力を使うけど、種族によって魔力の使い方が違うんだよ。私達妖精や精霊の魔法は、主に魔法での遠距離や補助しか使わないんだよ。」

「じゃあシルフィーは援護系だな。」

「者って、全員魔法が使えるのか？」

「違うよ例外はあるけど、だいたい上位の者や頭の良い者しか魔法は使えないんだよ。」

「他にはエルフかな、エルフの女性の魔法は妖精や精霊の魔法とだいたい同じで魔法で遠距離や補助もするし、弓を使う者も居るよ。」

エルフはやっぱり耳が長かったり、美形が多いんだろうなあ。

「エルフの男性は接近戦で、魔法は女性と違って魔力しか使えない。魔力だけでも接近戦で役に立つんだよ。魔力を体の部分に集める事で集めた部分を強化出来るんだよ。」

魔力の使い方も覚えといった方が良さそうだな。 「あとはドラゴンだね。ドラゴンや飛竜種は、ブレスを撃つよ。種によってブレスは違うんだよ、例えばファイヤードラゴンは炎のブレスで、アイスドラゴンは氷のブレスを撃つんだよ。」  
この世界にドラゴンとか居るんだな。

「ドラゴンって、強いのか？」

「強いよ、種族の中で最強って言われてるよ。」  
やっぱり、最強なのかゲームや漫画の中でも最強だしな。

「それに：ドラゴンは赤ちゃんでも例外無くAランク以上だよ。」  
「ランクって何だ？」

「ランクは強さの位だよ。」  
位って言われても基準が分からん。

「Aランクって強いのか？」

「うん、小さな村を壊せる位強いよ。」

「強！」 流石は最強種、赤ちゃんでも小さな村は壊せるのか。

## 7 話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

## 8話（前書き）

殆んど説明です。

## 8話

「次は、人間の魔法の事を説明するよ?」

「分かった。」

「人間は自分の中にある魔力で魔法を使っているんだよ。」

「じゃあ、魔力を使いすぎたらどうなる?」

「人間にとって魔力は生命力だから使いすぎると、寿命が短くなったり凄いい脱力感になるし、無くなったら死ぬんだよ。」

「魔力はどうやって回復するんだ?」

「寝たりすれば回復するんだよ。」

「じゃあ、大気中の魔力を使えば…」

「無理だよそこが、人間と者の違いだよ。」

「違い?」

「何が違うんだ?」

「大気中の魔力はイメージが出来れば使えるけど、人間には使えないんだよ。」

シルフィーは確か人間はイメージが出来ないって言ってたな。

「人間はイメージが出来ないからか？」

「それもあるけど、使えない一番の理由があるその理由は…人間が大氣中に魔力があることを知らないからなんだよ。」

「大氣中に魔力があることをもし人間が知っていたら？」  
もし知っていたら使いすぎる事も無いと思うが…

「知っていたとしても、無理だね。人間はイメージが出来ないって言ったでしょ？」

そうだったな…

「人間の魔力って多いのか？」

「賢者や帝と呼ばれている人間は多いんだよ。」

「普通の魔法使いは？」

知らないで魔法を使いすぎると、誰かに目を付けられそうだからな…

「確か…1000だった気がするんだよ。」

多いのか分からんな…

「魔法のランクとかあるか？」

「あるんだよ」

言葉じゃ分かりづらいな

「空中に弱い順番に書いてくれ。」「良いよ確か…」

下級魔法<中級魔法<上級魔法<下級魔術<中級魔術<精霊魔法<上級魔術<古代魔法<究極魔法

書いたんだよ。」

魔術？

「魔術って何だ？」

「魔術は魔方阵を使った魔法なんだよ。」

確か：人間は書けるけど、意味や文字が読め無いんだよな。

「人間は使えるのか？」

「使えたら王国魔術師団並みだよ」

王国？まあ後で分かるだろ。

次に精霊魔法って何だ？

「ありがとぅ：精霊魔法って何だ？」

「いえいえ、精霊魔法は精霊の力を借りて使う魔法の事だよ。」

「精霊の方が妖精より凄いのか？」「逆だよ。位でだったら精霊より妖精の方が上なんだよ。」

「本当なのか？」

俺は精霊の方が上だと思いが：

「本当なんだよ。大昔に精霊と妖精で話し合って決めたんだよ。」

凄いな、俺は精霊の方が上だと思っていたが：

「じゃあ何で、精霊魔法何だ？」

「それは知らないんだよ。」知らないのか…まあ良いや。

「他に魔法の事で聞きたい事ある？」

「ある。」

俺が今知りたいのは…

「弱い順番で魔力の消費量を書いてくれ。」

シルフィーは普通の魔法使いの魔力量が10000って言うてたから消費量を聞いて調整すれば、目立たない筈。

「良いよ」

下級魔法100〳700

中級魔法1000〳2000

上級魔法6000〳9000

下級魔術1万〳3万

中級魔術4万〳7万

精霊魔法1万〳10万

上級魔術20万〳35万

古代魔法40万〳70万

究極魔法は誰も使えた事が無いから分からないんだよ。」

普通の魔法使いで中級魔法一発が限界か…

「賢者や帝と呼ばれている人間の魔力量は？」

「確か…20万〳30万位の筈なんだよ。」

普通の魔法使いと比べたら凄い差だな。

だが…下級魔法と中級魔法の違いが分からんから、人の前では、使



えないふりをしておくか。「次は契約なんだよ。」

シルフィーは安心出来るって言ったけど…

「本当に俺で良いのか？」

「うん、マサヤだから良いんだよ。」

何だかそう言われると照れるな。

「じゃあ、その魔方陣の中に入るんだよ。」

「了解。」

## 8 話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

## 9 話（前書き）

小説書くの難しい。

## 9 話

契約か緊張するぜ。

「緊張しなくても大丈夫なんだよ。」

少しは楽になったかな。

「ありがとう」

「いえいえ。じゃあ、始めるよ。」

「おう」

俺が魔方阵の中に入った瞬間契約に必要な呪文が頭の中に入ってきた。これを言えば良いんだな…

「我風の妖精シルフィーは田崎真哉を契約主と認める貴方はこの契約を認めるか？」

「我田崎真哉は風の妖精シルフィーの契約を認める」

「此処に契約を結ぶ」

ピカ

魔方阵が一瞬だけ光り消えて無くなった。

「終わったのか？」

「もう少しで終わるけど、我慢してね？」

何を？と言おうとしたが…

「いってえええええ」左脇腹の猛烈な痛みで言えなかった。

「言って無かったけど、契約を行うと体の一部に契約の証しを彫るからかなり痛いよ。」

「そうゆう…ことは…先に…言え…」  
くそうかなり痛かったぜ。

証って言ってたな、どんな証だ？俺は服を捲って左脇腹を見たら…

「悪くは無いな。」

俺の左脇腹には天使の翼を広げた様な緑色の翼の跡が残っていた。

「改めて、これからよろしくね。」

シルフィーは小さい右手を真哉に差し出す。

「ああ、此方こそよろしく。」真哉はシルフィーの小さい右手を優しく握った。

## 9 話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

## 設定（前書き）

変わる事もあると思いますが、設定は大体これです。  
8月10日編集しました

## 設定

魔物、魔獣ランク

F・・・殆ど無害な魔物

E・・・初心者でも勝てる位

D・・・初心者3人なら勝てる位

C・・・熟練者なら勝てる位の魔物

(熟練者は初心者5人分)

B・・・熟練者5人なら勝てる位の魔物

A・・・小さな村を破壊出来る位の魔物

S・・・小さな街を破壊出来る位の魔物

SS・・・大きい街を破壊出来る位の魔物

SSS・・・国を破壊出来る位の魔物

(SSSランクは撃退した事はあるが、倒した者は誰もいない。

)

(獣系は魔獣、獣系意外は魔物)

村・街・国の人数設定

小さい村・・・60～100人



中くらいの村・・・300～500人

大きい村・・・1500～2500人

小さい街・・・3000～5000人

中くらいの街・・・1万5000～3万人

大きい街・・・5万～10万人

国・・・50万～300万人

ギルドランク

F～D・・・初心者

C～B・・・熟練者、王国兵士並

A・・・王国騎士団兵士並

S・・・王国騎士団副隊長並

SS・・・王国騎士団隊長、近衛兵士並

SSS・・・賢者、帝並

（魔物のランクと比べると、F～Bは1ランクA～SSSは2ランク下がる）

## 設定（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

## 10話（前書き）

前半は説明です。後半に戦闘を入れてみました。まだまだ未熟者ですが宜しくお願いします。

## 10話

「これからどうする？」

確かにどうするか？うーんまずは…

「魔法の練習して良いか？分からない所は教えて欲しい。」

「分かったんだよ。」

「ありがとう」

目立つのは好きじゃないし、目を付けられると利用される可能性が高いから調整しといて損は無いだろ。

「いえいえ」

先に色々聞いてから魔法の練習をするか。

「属性は何個あるんだ？」

「確か…12個あるんだよ。」

思ってたよりあるな

「それにも強さとかあるのか？」

「あるけど、魔法は魔力で作るから魔法同士なら魔力の多い方が強いんだよ。」

魔力の多い方が有利なのは分かったが…

「属性に強弱は無いのか？」

「あるんだけど…言葉じゃ伝わりにくいから、書いてあげるんだよ。」

「火、水、土、風」下級魔法

炎、氷、大地、嵐」中級魔法

闇、光」上級魔法

時、空間」上級魔術」

「時と空間って何だ？」

「時と空間は文字通りで時は時間を戻す事と速くする事は出来ないけど、時間を止めたり、遅くする事は出来る。空間は場所と場所を繋ぐ事が出来るし、相手を自分で作った空間に閉じ込める事も出来る。」

時と空間って凄いな……ちょっと待て今確か……

「空間を作る？空間って作れるのか？」

「作れるけど、今作れる人間や者は居ないんだよ。」

「今って事は、前に誰か作った奴が居たって事だよな？」

何で作ったか分かればもしかしたら……

「確かに前に作った者は居たけど、その者はもう亡くなったから今では作れる人間や者は居ないんだよ。」

その者に会う事は出来ないのか……

「何で空間を作ったか知ってるか？」

もしイメージで作ったなら俺もイメージで空間を作る事が出来るか

もな。

「うーん…確か…イメージだったかな、でも何でそんな事聞くの？」

イメージか、よしイメージなら出来るかもな。

「出来るか試そうと思ってな。」

「む、無理なんだよ、今まで沢山の者が挑戦したけど誰も出来なかったんだよ。」

確かに沢山の者が挑戦しても出来ないから、俺も出来るか分からないが…

「それでも、やってみないと分からないだろ？」

「はあ、分かったんだよ、でも気おつけるんだよ、いきなり上級魔術を使う人間を見た事が無いから何が起こるか分からないんだよ。」

シルフィーに心配掛けちゃったな。

「よし、やってみるぜ。」空間に黒い小さな穴が有る事をイメージ

「凄いなだよ、小さいけどちゃんと出来てるんだよ。」

確かに出来ているが…此処から本番だ。

黒い穴が俺の身長178cmと同じ位に広がっていくのをイメージ

「凄い、黒い穴が広がっていくんだよ。」

「よし、完成」

少しでかいが完成だ。 2m位あるかな

「今まで沢山の者が挑戦して、出来なかったのに本当に真哉は凄  
んだよ。」

「ありがとう」

後はこの空間に入って魔法の調整をしてから、人の居る所に行つて  
みよう。

ガサガサガサ

「何だ？」

まさか、またあの狼か？

キューン

ガウ

狼は分かったが、何だこの白いの？

「は、白竜」

竜って事は赤ちゃんでもかなり強い筈だが…

「あの狼って強いのか？」

「狼？ファングの事？」

この世界では狼じゃなくてファングって言うのか。

「ファングって強いのか？」

「竜に比べたら弱いよランクならDなんだよ。」

じゃあ何で弱い奴に襲われてるんだ……うん？右足に何か刺さって  
るぞ。

「シルフィー、白竜の右足に何か刺さってるぞ。」

「本当、凄い血の量早く助けてあげるんだよ。」

確かにあれじゃ可哀想だ。

「ああ、シルフィーは此処で待ってる。」

「私も付いていくんだよ。」

「分かった、俺はフアングと戦うからシルフィーは白竜の所に行つて治療してくれ。」

「分かったんだよ。」先ずは、白竜からフアングを離したいがどうする…

「風よ」

ブン

シルフィーの右手から塵気楼の塊がフアングに向かっていき…ギャン

フアングに当たって、白竜とフアングを離れた。

「流石シルフィー頼りになるぜ。」

「えへへ、ありがとう」

本当に頼りになるぜ

「じゃあシルフィー、白竜は任せたぜ。」

「うん、真哉も気おつけるんだよ。」

「おう」

ガルルル

フアングは俺に敵意剥き出しだな。



「ふう」

力はOFFだな…この世界に来て身体能力が上がってるからファング相手に何処まで行けるか試して見るか。

ガウ

「おっと」考え事は後だな今はこいつに集中するか。

真哉は右腕を腰の近くで止めて左腕を肩と同じ位の位置に持ち上げた

「我流攻守の構え」

左腕で相手の攻撃を捌いて右腕で攻撃する

攻守の構えと言っているが俺は殆んど相手の様子見に使う。

ガウ

ファングが真哉に噛み付こうと飛び込んで来た。

前のファングと同じパターンだな…なら俺は少し変えるか

真哉はしゃがんで右手を握りファングの…

「はっ！」

ガッ

喉を潰し少し浮き上がった所で回し蹴りで…

バギ！

ファングの頭蓋骨を砕く

「うっ」

グロい事になったな、今のは魔物だから良かったがもし人間だったら吐いてたな。

シルフィーの所に行くか

「あっ、真哉大丈夫だった？」

「ああ、俺は大丈夫だが白竜は大丈夫か？」

「それが：刺さってる物は抜いたけど血が止まらないんだよ、どうすれば良いの？」

「うーん、上手く行くか分からんが試す価値は有るだろ」「俺がやってみる。」

体が小さいな大体30cm位か？

真哉は白竜に近付いて白竜の右足を両手で優しく被せる

「治ってくれよ。」

傷が治っていくのをイメージすると…

ピカー

眩しくない優しい光が白竜の右足を包んだ。

「な、治った。シルフィー治ったぞ」

「えっ本当に？」

「ああ、見てみる」

「本当だ、傷口が無い」

「だが、血を流し過ぎたから食べ物と暖かい物が必要だ」「食べ物なら私が探して持ってくるんだよ。」

シルフィーは羽を使って飛んで行った。

じゃあ俺は暖かい物だが…あれを使うのか？いや、今はそんな事を考  
えてる暇は無いな。

真哉はファングの所に向かった。

## 10話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

## 11話（前書き）

更新遅れてすいませんでした。

## 11話

ファングの所に来たは良いが、どうやって毛皮を取るんだ？

取り敢えず…

「風よ」

右手に風を集め風の包丁をイメージ

ファングの腹に風の包丁を入れ毛皮を取っていく…

1時間後…

「で、出来た」

毛皮は取れたが凄くグロい事になった。両手は血まみれだし、服や顔にも血が付いたしな。

「これじゃあ、出歩け無いな。」

水をイメージして血を落とさないと…先ずは両手だな。

「水よ」

20cm位の水の塊をイメージ…おっ出来た

ビチャ

あれ、落ちた？うーん………そういえば、浮かぶイメージを忘れてた。

「水よ」

水の塊が少し浮かぶイメージ…

「出来た」

手と顔と序に毛皮を洗ったのは良いが服はどうするか？

俺の着てる服が綺麗なイメージすれば良いのか？まあ試さないとなからんしな。

今度は少し大きい30cm位の水の塊が少し浮いてるイメージ  
「出来た。」

次は服を脱いで服を、水の塊の中に入れて洗濯機の回転をイメージ  
しながら綺麗になっていくのをイメージ

「凄えー、水が回転してる」

5分後

もう良いかな？取り出して確認するか。

「完璧、血の跡が無いぜ。」

後は乾かすだけだな。

「風よ」

イメージは…ドライヤーだな。服と毛皮に風を纏わせて完成。

3分後

乾いたか？

「おー、少し湿ってるけど大丈夫だろ。」よし、じゃあ白竜の所に  
戻ろつ。お、まだ白竜は寝てるのか？

「結構時間掛かったと思ったんだがな。」

まあ良いや、この毛皮を被せとくか。

真哉が白竜に毛皮を被せ終わった瞬間に…

パチ

「うお、びっくりした。」

白竜が目を覚ました。

キヨロキヨロ  
キューン

白竜が辺りを見回して、真哉を見て鳴いた。

「やべ、超可愛い。おいで」

真哉は手を広げながら、白竜を呼んでみた。すると…  
キュイキュイ

白竜が鳴き声を上げながら翼を使って真哉にゆっくり飛び込んだ。

「超可愛いぜ。よしよし」

ナデナデ

ちよつとゴツゴツしてるかと思ったら、見た目以上に柔らかい。俺は白竜を撫でながらそう思った。

そういえば、シルフィー遅えーな、何処まで行ったんだ？

真哉が考えていると…

「お、お待たせ」

シルフィーが葉っぱで出来たでかい籠をフラフラしながら持ってきた。

「おいおい、大丈夫か？」  
俺が支えながら言つと…



「あつ、白竜だ目を覚ましたんだね。」

籠を俺に任せて白竜の所に行きやがった。

「おつと」

危ねえ落とす所だったぜ。これ何キロあるんだ？身体能力が上がってるおかげで楽に持ち上がるが、俺が見た所30k〜40kはあるぞ？

「シルフィーこれどうやって、持ってきたんだ？」

俺は白竜を見ているシルフィーに聞いて見た。

「風を使つて重さを軽減しながら持つてきたんだよ。」

魔法つて万能だな。

「籠の中身は何が入ってるんだ？」

ベリーの実は分かるが、俺の知らない色や形が違うキノコや、草、木の実、蜂蜜がある。

「説明してあげるんだよ。」

「これはランブルの実と言って、ベリーの实より甘味が強く、酸味が弱いんだよ。」

ランブルの実は、皮が黄色いブドウだな。

「次にこれはケートの実と言って、ベリーの实より甘味が弱く酸味が強い」

形は、なしに似ているな…だが、色が黄色？

「味見していいか？」

「良いんだよ。」

「風よ」

右手にナイフをイメージ。

「イメージ上手くなっただよ。」

「ありがとう。」

左手にケートの実を持って、風のナイフで皮を剥いていく。

「いただきます。」

俺はケートの実を一口食べたが…

「酸っぱえええ」

後悔した。

「酸味が強いって言ったんだよ？」

確かに言ったがレモンより酸っぱいとは、思わなかったぜ。

口直しに…

「ランブルの実をくれ。」

「はい。」

「ありがとう」

これは大丈夫だよな、確かベリーの实より甘味が強いって言ったし…

「いただきます。」

おっ美味しい、色は違うが味はブドウにそっくりだな。

「酸っぱいの直った？」

「ああ、直ったありがとう」

「いえいえ、じゃあ改めて説明するんだよ。」

「これは、薬草だよ。苦味が強いけど、根っこを飲めば傷の痛みが和らぐし、葉っぱを傷口に張れば治りが早くなるんだよ。」

見た目はゴボウより小さい位で、約20?って所か。

「次にアーズキノコは少し甘味があって、生でも食べられるし、調合に使われる時もあるんだよ。」

アーズキノコは青いシイタケだが…

「調合って何だ?」

「調合って言うのは素材と素材を合わせて新しい物を作るんだよ。」

調合って面白そうだな

「俺でも出来るのか?」

「簡単な物なら出来るけど、専門的な知識が無いと難しい物は作れないんだよ。後は…街に行けば本に載ってるんだよ。」

一様出来るのか、難しいの作って見たいが…本読むの苦手だから、暇があつたら見つけて読んで見るか。

「教えてくれてありがとう」

「いえいえ、説明続けるんだよ。」

「これはアルトーンキノコと言って、香りが良くて、味も凄く美味しいんだよ。だけど、これは見つけるのが大変で数が少ないから、街で買うと凄く高いんだよ。」

形は松茸に似ているが…色が紫かよ。何か危ない色してるな。

「最後にこれはアジューダの蜜と言って、アジューダと言う魔物が花の蜜をタンゴ状にして固めた物なんだよ。集める花の蜜によって

味が違うけど、殆どは甘いんだよ。」

形はニワトリの卵か…割れば蜜が出て来るのか?」説明ありがとう。

「

「いえいえ」

だけど…

「白竜ってこんなに沢山食べられるのか?」

「食べられないんだよ。」

「じゃあ何で?」

「序でに私達も食べようかなって。  
成る程な。」

「ありがとう、じゃあ皆で食べるか。」

「うん」

キューイ

「じゃあ俺が料理するぜ」

「私は皿の代わりを探して来るんだよ。」

皿の代わりか…

「待ってくれ、試したい事がある。」

「うん?分かったんだよ。」

水を浮かせる事が出来たしもしかしたら…

「風よ」

ベリーの実が浮くのをイメージ…

「浮いてる。」

「皿の代わり探さなくて大丈夫だろ？」

「うん、でも本当に凄い。こんなに早くイメージが上達してるんだよ。」

「早く食べようぜ。」

「うん、食べよう。」  
キューイ

「ほら、白竜」

ベリーの実を白竜に近づけると…

キュ？

スンスン

匂いを嗅いで…

キューン

パク

ゴクリ

「早っ」

一口かよ…でも面白れえ

よし、次はランブルの実を 4つ白竜の所に浮かせるスンスン  
匂いを嗅いで…

キラーン

白竜の目が一瞬光った気がしたその瞬間に…

パクパク

ゴクリ

パクパク

ゴクリ

「早えー」

よーし、次は…

「真哉は食べないの？」

「うん？俺は今腹が一杯でさ」  
フアングでグロいを見ちまったからな。

「そうなんだ…でも後でお腹がすくと大変だから何個か取って置くだよ。」

シルフィーは優しいんだな「ありがとう。」

「いえいえ、だけど後で絶対食べるんだよ。」  
村や、町に行くと思うから…

「おう」

移動中に食べるか。

## 11話（後書き）

一週間に一回は更新出来ると思います。

## 12話（前書き）

前回より短いです



## 12話

おかしい、白竜は10k以上食ってる筈なのになんで…

「腹が膨らんでねえーんだよ。」

「い、いきなりどうしたんだよ？」

シルフィーが驚きながら俺に聞いて来た。

「いや、あの小さな体の何処にあの量が入るのかわかって思ってたさ。」  
30?の体に10kも入るのか?

「確かドラゴンは、食べた物で体力回復したり、魔力に変換するから満腹になる事は少ないんだよ。」

へえドラゴンって便利な体なんだな。

「教えてくれてありがとな。」

「いえいえ、分からない事があつたら何でも聞くんだよ？」  
シルフィーは俺に向かってそう言ってくれた。

「おう」

シルフィーに頼ってばかりだな俺は…

「シルフィー食べ終わったか？」

「うん、食べ終わったんだよ。」

「これからどうする?」

「うーん…村に行つて見るんだよ。」

村か…何があるのか楽しみだな。

「此処から遠いのか？」

「此処からだ…歩いて3日は掛かるんだよ。」

予想以上に遠いな…

「それに私は人間に会いたく無いから…」

シルフィーの体が光り始めだんだん小さい光りの球体になっていき…

「首飾り？」

真哉の目の前には鳥の形がかたどられた首飾りがあった。

（人間に気付かれ難いからこれを着けるんだよ）

「ああ、だけどこの頭に響く声なんとかならないか？」

（この状態だと、これしか出来ないんだよ、ごめんね。）

「いや、大丈夫。」

慣れれば大丈夫だろ。

（あと、私に伝えたい言葉を思えば伝わるんだよ。）

それはありがたい、人前でぶつぶつ言っただら変な目で見られるかな。じゃあ伝わるか試して見るか。

（シルフィー聞こえるか？）

（ちゃんと聞こえるんだよ。）（これから村に行きたい所だが…

「白竜どうするか？」

（白竜に聞くのが早いんだよ。）

「白竜って喋るのか？」

（喋らないけど、理解は出来るんだよ。）

成る程、俺が質問して首を振って貰えば良いって事だな。

「なあ白竜」

キュイ？

「俺達は旅をするんだが…一緒に行くか？」

キュイ

白竜は迷わず首を縦に振った。

「よろしくな、白竜」

キュイ

白竜が真哉に飛び込んで…ペロペロ

真哉の顔を舐めた。

「おー、よしよし」

（白竜って真哉に随分なついてるんだよ）

「俺は大した事はしてないぜ。」

（私が治せなかった傷を一瞬で治したんだから大した事だと、私は思うんだよ。）

「そうなのか？俺はただ、治って欲しいって思ったら、出来ただけのまぐれだぜ？」

（そうだよ、例えまぐれだとしても出来たんだから大した事なんだよ）

「まあ、ありがとな」

（いえいえ）

「そろそろ行くとするか」  
キューイ

「おつと、危ないぞ」

白竜が真哉の頭に飛び乗った。  
キューン

「次からは気おつけるんだぞ？」  
キューイ

（真哉つてお父さんみたいだね）

お父さんか…

「白竜に親は居ないのか？」（分からない、だけど竜は青年になったら親を離れて暮らす筈なんだけど…）  
と言う事は、この白竜に親は居ないのか…

「俺がお前の親になってやる」  
キューイ

真哉は白竜の両脇を手で持ち上げながら言った。

「まずは、名前を考えよう。」（どんな名前を付けるんだよ？）

「うーん、やっぱりシロだろ？」

（随分安直な名前なんだよ）

俺もそう思うが…

「簡単に覚え易いだろ？」

（そうだけど…白竜に聞いた方が良さそうだよ？）

「そうだな」

「白竜」

キユ？

「白竜…今日からお前の名前はシロだ」

キユイ

「シロに名前が付いた事だし、村に行くぞ。」

（村に行くんなら、シロを隠した方が良いんだよ。）

「何で？」

（竜は赤ちゃんでもAランクなんだよ。）

そうだった、どうすれば…そうだイメージで俺達以外見れなくすれば大丈夫な筈…

「シルフィー、その首飾り状態でも外は見れるのか？」

（見えるんだよ）

シルフィーで試して見るか「シルフィー、シロを見てくれ」

（分かったんだよ）

シロが透明で俺以外見れないようイメージ

（ま、真哉シロがいきなり消えたんだよ。）

俺はシロが見えるからイメージは成功したな

「シロは目の前に居るぜ？」

（えっ居ないよ。）

イメージ解除

（あれ？シロが見えたよ、どうゆう事？）

「村に白竜が来たら混乱するだろ？」

（うん、竜は赤ちゃんで村を壊せるんだよ）

「それで、シルフィーで試させて貰った。」

（そうなんだ、でもこれでシロも村に入れるね）

「ああ、そうだな」

## 12話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

### 13話（前書き）

ギリギリ間に合いました。  
相変わらずの文才ですが、読んでくれると嬉しいです。



### 13話

「シルフィー、今からシロを俺達以外には見えない様にするから見  
えなかったら、言ってくれ」

（分かったんだよ）

シロが透明で俺達以外見れないようイメージ

俺は見えるが…

「見えるか？」

（見えるんだよ）

大丈夫だよ…な

「シロ、俺の頭に乗ってくれ」  
キューイ

「走るからしっかり掴まるんだぞ？」

キューイ

「シルフィー、道案内頼むぞ」

（任せるんだよ）

「どの方向に向かえば良いんだ？」

（ずっと真っ直ぐに行けば着くんだよ）

「俺が今向いてる方向に行けば良いんだな？」

（そうだよ）

「分かった、ありがとう。」

（いえいえ）

俺が向いてる方向を真っ直ぐで、迷わない為には…

「太陽が右側に有ることが目印だな。」

（どうしたんだよ？）

「いや、何でもない。」

（じゃあ、急ぐんだよ）

「おう」

序でにフアングの毛皮持って行くか。

走って10分後：

異世界に来て身体能力が上がったのは、木の実を取りに行った時に分かったが…

俺にこんな脚力無い筈だ、それに、俺的にはジョギング程度の力しか出していないが…電車並に速い。

（ま、真哉）

ジョギングでこんなに速いって事は…

（真哉、危ないんだよ！！）

「えっ？」

やべっ、止まらねえ

真哉の目の前には巨大な木があった。

くっ

俺は咄嗟に腕で顔を守った瞬間：

ドゴーンッ

暗いな、俺どうなったんだ？

（真哉大丈夫？）

（ああ、大丈夫だが、木にぶつかって後どうなった？）木にぶつかったのは分かるが、何故暗いんだ？

（大丈夫なら良かったんだよ。今真哉は木に埋まってるんだよ。）

木に埋まるって聞いた事ないぞ

（そ、そうか教えてくれてありがとう。）

（いえいえ。でもどうやって出るの？）

石の力を使えば出れるが、石の力は出来るだけ切り札として使いたいから…

（シルフィー、魔力の使い方を教えてくれ。）

（今から魔力を流すんだよ）

（いや、教えてくれれば自分でやるぞ？）

（教えただけじゃ使えないんだよ。）

（何故だ？）

（魔力を他人から流して貰わないと、絶対に気づけないんだよ。例えば賢者や帝でもね。）

そうなのか…

（シルフィー、魔力流して貰って良いか？）

（良いんだよ。あと、魔力を辿って核を見つけるんだよ。）

核？

（核って何だ？）

（魔力を辿れば分かるんだよ。）

（今から魔力を流すんだよ？）

（おう）

シルフィーから、魔力が流れて来てるのは分かるが…（少し気持ち悪いな。）

（自分の魔力とは、違うからね。体が拒絶してるんだよ。）  
成る程、ゲームや漫画みたいには、ならないんだな。

（核は見つかった？）

一様見つけたが…

（核って1人何個あるんだ？）

（一個しか持てないけど、どうしたんだよ？）

（いや、何でもない。）

見当つくが、俺には核が2つあった。俺の半分位の光りの玉と…かなり巨大な光りの玉があった。例えるなら、野球ボールと空位の違いがある。野球ボールが俺の元々の魔力で、空位のが変な石のだから。

（核の大きさが魔力が決まるのか？）

（そうだよ、大きさは最大で人間位だよ。）

最大でって事は、賢者や帝が人間位の大きさだから、俺はその半分か…

（俺も結構魔力あるんだな）（でも、真哉はイメージが使えるから魔力は無限だよ？）

そうだった、まあ自分の魔力が分かったし良しとするか。

（魔力をイメージと同じように集めれば良いのか？）

（そうだよ。あと魔力に色を付けるとイメージしやすいんだよ）

確かにイメージしやすいが…色は…青で良いだろ。

右手、左手に青い魔力が集まるイメージ

（青い魔力にしたの？）

（ああ、イメージがしやすいと思ったからな）

本当はゲームに出て来たのを見たから、イメージ出来ただけなんだよな。

俺的には、ただ纏っているだけだと思うが…

（これで大丈夫なのか？）

（まだ魔力が荒いけど、それでも力が倍近く上がるんだよ）

纏っているだけで倍近く上がるって凄いな。

そろそろ、此処から出るか。

力が倍近く上がっても、きついな。

ギシギシ

もう少し

「っ！！」

バギバギ

「はあ…はあ」  
で、出れた。」

真哉はその場に胡座で座った瞬間…  
キューイ

シロが目には涙を溜めながら真哉に飛び込んだ。  
「おー、シロ大丈夫だったか？」  
キューイキューイキューイ

シロは涙を堪えながら真哉に抱き付いた。  
何を言ってるか分からんが…

「心配掛けて悪かった。」

俺はシロの頭を撫でながら言った。

キュー…イ

寝ちまつたか…

「本当に悪かったな。」

寝ているシロの頭を撫でながら謝った。

それと…

「シルフィー、悪かった。」俺は首飾りを優しく握りながら言った。  
（私は大丈夫だけど…あんまり心配を掛けちゃ駄目なんだよ？）

「そうだな」

（じゃあ、改めて村に行くんだよ。）

「おう」

走って一時間後…

「腹減らないか？」

（確かに、お腹が減ったんだよ）  
キューイ

「じゃあ皆で…」

うん？

「どうしたんだよ？」

シルフィーが首飾りから妖精に戻りながら俺に聞いて来た。

「ちょっと静かに」

俺は口到人差し指を当てながら周りを静かにさせる。サーー

音は小さいが水の流れる音がする

「近くに水の流れる音がする。」

「えっ？うーん…聞こえないんだよ？」

キューイ？

サーー

「確かに聞こえる。こっちだ」

「あつ待つてよー」

キューイ

走って5分後…

あった。水の音を出していたのは…

「滝だったのか。」

「ま、真哉く速いんだよ。」 キュイ

「わ、悪い。」

釣りが趣味だから、水の流れる音が聞こえたから、ついはいじまったぜ

「釣りをしても良いか？」

「良いけど、道具が無いんだよ。」

確かに、竿は木の棒で、糸は…蔓で良いが…

「針をどうすれば…」

キュイ

シロが俺に何かを差し出した。

これは…

「石か？」

石で何が…そうか、大昔は石を削って石の針を作ってたな。写真でも見た事あるから、もしかしたら作れるかもしれない。

「シロ、ありがとう」

キュキュイ

「風よ」

右手の人差し指に風を集めて鋭いナイフをイメージ

石を左手で持って右手の人差し指で削っていく。



30分後…

やっと石の針が出来た。

隣を見ると…

「し、失敗は成功のもと」

「失敗し過ぎなんだよ。」

キュイ

そこには、約50個の失敗作があった。

「出来れば良いんだ。」

さーて、木の棒に蔓を巻いて、蔓に針を付けて針にエサ…を…

「エサがねえ」

忘れてた。エサが無いと魚が来ないぞ。

「探すか」

石の裏とかにいるだろ。

30分後…

石の裏を探しても見つからず滝壺の近くに行くと…直ぐに貝類が見  
つかりました。

「俺の苦勞は一体…」

「だ、大丈夫？」

シルフィーが心配そうに俺に聞いて来た。

「ああ、大丈夫だ」

まあ見つかったし、良しとするか。

「よし、じゃあ釣りを再開するが…シルフィー達はどうする。」

「私は見てるんだよ。」

キュ…イ

シロは眠そうだな。

「そうか、見てると退屈だろうから眠かったら寝てて良いぞ。毛皮を持ってきたから」

「うん、ありがとう。でも少しだけ見てる。」「了解」  
石の針に貝を付けて…

「とう」

チャポン

これで魚が食い付くまでじっと堪え…  
ググー

「早っ」

引かないと…

もの凄く…お、重い

プチン

「……う、嘘だろ」

苦勞して作った石の針が。

3分後…

意外にも石の針を直ぐに作る事が出来た。

「もう一度挑戦だ。」

針にエサを付けて…

「とう」

チャポン

「今度こそ釣ってやる。」

ググー

来たこの重さは、さっきの奴だ。

ググー

少し泳がせて、疲れた所で…一気に釣り上げる

10分後…

蔓がボロボロだ。そろそろ釣り上げないと、やばいな。  
グッ

今がチャンス

「うおおおお」

ザッパン

来たー。やったぜ。

これは…

「結構でけえな。」

70? って所か。

3時間後…

「いやー大漁、大漁。」

初めて釣り上げてから、釣れる、釣れる。途中で大きめの葉っぱの籠を2つ作ったが、2つとも籠一杯になった。

「シロ、シルフィー起きてくれ。」

「う、うん? どうしたんだよ?」

キューイ?

「待たせて悪かった。今から飯にするから来てくれ。」

「やったー、ご飯だー」

キューイ

シルフィーとシロは喜びながら俺に付いてきた。

「シルフィー、そこにある薪に火を付けてくれ。俺は魚を捌くから。」

「

キューイ

「シロどうした?」

キュキュイキューイ

言葉は相変わらず分からないが、シロがジェスチャーしてるから大体分かった。

シロが自分の口を指差して次に薪を指差したって事は…

「プレスで火を付けてくれるのか？」

キューイ

合っていたようだ。

「じゃあシロ、頼むぜ？」

キューイ

シロが返事をして、早速翼で飛び薪に向かって行き…キューウー…  
口からプレスを吐いた。

「凄えな」

例えるなら火炎放射機だな。って…

「燃やし過ぎだー！」

キューッ

俺が大声を出したらシロがびっくりして、プレスを止めた。

俺が薪の所に行く…

「見事な灰になってるな。」キューン

シロが申し訳なさそうに頭を下げている

「大丈夫だって、次は火を少しだけ付けるんだぞ？」

シロの頭を撫でながら言った。

キューイ

よし、じゃあ…

「シルフィー、シロと一緒に薪を拾って来てくれ。」

「分かったんだよ。」キューイ

シルフィーは羽で、シロは翼で飛んで行った。

さてと…

「俺は魚を捌くとするか。」

右手人差し指に鋭い包丁をイメージした風を纏わせる。

先ず魚の頭を切り落とし、腹を切って内臓を取り魚の中を水で洗って綺麗にしていく。

魚の見た目は酷いが…

「結構綺麗な白身だな。」

綺麗な白身だし、刺身にしてみよう。

30分後…

ちよつと拘り過ぎたか？

白身の薔薇が6つ咲いていた。

「まあ1人2つで良いだろ。」次は…味気無いと思うが普通に火で焼くか？

「真哉ー、薪を持って来たんだよー」  
キューイ

おっ丁度良い所に来た。

結構持つて来たな…

「早速で悪いがシロ、薪に火を付けてくれるか？」  
キユイ

シロが頷き…  
キユウ

小さい火を吐いて、薪に火を付けた。

「偉いぞシロ」  
キユイ

「シロとシルフィーは、先に食べて良いぞ。」

「真哉は？」

「魚焼いてるから焼き終わったら食べるよ。後、食べるのは2つまでだ。」

「分かったんだよ。食べ物は何処にあるんだよ？」  
キユイ

「そこにあるぞ。」  
俺は指差して刺身のある場所を示した。

「わー、凄いんだよ。真哉は本当に器用なんだよ。」

「ありがとつ。まあ食ってくれ。」

「何か勿体ないけど…いただきます。」  
キューイ

じゃあ俺は焼くとするか。

予め綺麗にしていた魚に木の枝を口から入れて、火から少し離れた土に木の枝を刺す。

火を囲う様に8匹ほど繰り返す。

「焼けるまで暇だな。」

そうだ、木の実でも食べるか。

ベリーの実を剥いて…

「いただきます。」

シャリツシャリツ

「美味い。」

「真哉」

「うん？どうした？」

「これ持って来たんだよ。」

刺身か…

「ありがとな」

「いえいえ」

「いただきます。」



おっ意外とさっぱりしてて、臭みも少ない。

「美味い。」

「なあシルフィー」

「うん？」

「あの魚の量どうすれば良い？」  
腐ったら勿体ないしな。

「うーん…火の魔法で薫製とかは？」

成る程薫製か…

「薫製も良いんだが…魔法で軽くしても魚と果物もあるから持ちきれないぞ？」

俺が力持ちでも手が足りないしな。どうすれば…

「うーん…空間に入れる事は出来るが…」  
生物になると時間が経つと腐ってしまう。うん？時間？…そうか時間を止められれば出来る可能性があるぞ。

「シルフィー、少し離れててくれ。」

「分かったんだよ。」

1m位の黒い空間を目の前に作り、空間の中は時間が進まないのをイメージ。

出来たな。時間が止まるか不安だが…  
「取り敢えず魚を入れるか。」

「シルフィー、魚が焼けたら食べてて良いぞ。」

「分かったけど、終わったら真哉も食べるんだよ?」

「ああ、分かってる。」

魚を入れるのは良いんだが、後々他の物を入れる事になると思っから空間の中が分かりやすいと良いんだけど…

「真哉、大丈夫?」

「何でだ?」

「凄く険しい顔してたから大丈夫かなって思ってたんだよ。」

「大丈夫だ。ただ考え事が解決出来なくてな。」

シルフィーに聞いて見るか。

「私に話して欲しいんだよ。もしかしたら、分かるかもしれないんだよ?」

確かに、それじゃあ…

「分かりやすいって、どんな風に例える?」

「分かりやすいか…うーん説明じゃ駄目?」

「もっと具体的な例えは無いか?」

「うーん……本は駄目?」

「それだ！」

そうだ、本ならページを捲って何があるのか、どの位あるのかが分かるぞ。

「ありがとうシルフィー、シルフィーのお蔭で解決出来たよ。」

「いやー、まぐれなんだよ。」

「それでも、解決出来た。本当にありがとう。」

「いえいえ」

早速試したいが…本が無い。魔力で代用出来るか？試して見るか。

先ず青い本をイメージ。

透けているが…

「ちゃんと持てるぞ。」

「真哉って、イメージが本当に得意なんだよ。私もイメージは得意な方なんだけど、そういう物は作った事も見た事も無いんだよ。」

「ありがとな。」

見た事無いつて事は…名前作っても良いんじゃない？

「いえいえ。」

まあ俺は、魔本とするか。

魔力で本を作ったから、略して魔本。

魔本と空間を繋げて、空間の中に入った物は、本に載っていくのをイメージ。

「シルフィー」

「何？」

「イメージした魔法って、言葉で発動出来ないか？」

「言葉で発動させた者も居たけど、イメージ無しで完璧に言葉で発動した者は、たった1人なんだよ。それに、イメージが基本だから忘れると発動しない事もあるんだよ？」

「ああ、教えてくれてありがとな」

完璧に発動させた者が気になるが、今は空間の事だけを集中しよう

「いえいえ」

それに、発動した者が居るんなら試す価値はあるな。まあ物は試しだ

「空間よ開け」

あれ？

本当にイメージを忘れると発動しない見たいだな

「空間よ開け。」

目の前に1mの空間をイメージ

ブーン

機会の稼働した音を発しながら黒い空間が出現した。

「これで、少しは短縮出来る。戦闘に隙は命取りだからな」そこには、イメージした通りの空間があった

言葉で使える事も分かったし、後は練習だな

「一回休憩した方が良さそうだよ？」

「そうだな。」

飯にして、少し休むか。

真哉がシロの所に戻ると… キュイ  
シロが真哉に飛び込んで来た。

「おっと。」

遅くなって悪かったな。」 キュイ

うん？魚が減ってない。

「シロ、飯食ってなかったのか？」  
キュイ

「待っててくれて、ありがとな。」  
キュイ

3人は焼き魚の近くに座り…

「いただきます。」

「いただきます。」  
キュイ

30分後…

「ごちそうさまでした。」

「ごちそうさま。」  
キューイ

食べ終わったし、再開するか。

魔本をイメージ。

次に魔本と空間を繋げて、空間の中に入った物は、魔本に載っているのをイメージ。

「シルフィー、シロ来てくれ。」

「どうしたんだよ？」  
キューイ？

「俺は魚を入れるから、木の実とかをこの空間に入れるのを手伝ってくれ。」

「分かったんだよ。」  
キューイ

まずは魚を籠ごと空間に入れる。

魔本を見ると…  
スー

文字が浮かんできた。

「凄えちゃんと量まで書いてある。」

そこには、魚類20kと書いてあった。

「シルフィー、シロ入れてくれ。」

「シロ行くよ、せーの。」キューイ

シルフィーとシロで持ち上げて空間に入れていった。  
魔本には…

スー

木の実類15k、キノコ類4k、蜜1k、薬草10枚と新たに文字  
が浮かんできた。

「手伝ってくれてありがとな。」

「良いんだよ。」

キューイ

村に向かいたい所だが…

「空が暗いな。今夜は此処で寝よう。」

「じゃあ、私は寝るよ?」

「ああ、悪いな予定を変えて」

「大丈夫だよ。私は真哉に着いていくから。」

本当にシルフィーは優しいな

「ありがとう。お休み。」

「お休み。」

明日は村に行くか。  
「俺も寝よう。」



### 13話（後書き）

読んで下りありがとうございました。

## 14話（前書き）

前回よりかなり短いです。

## 14話

チュンチュン

パサパサ

うん？

「朝か」

うーん…はあ

俺は、体を伸ばしながら起きた

まだ薄暗いな

「皆が起きるまで、時間はあるから何をして時間を潰そうか」  
うーん…魔法や魔力の事を整理するか

先ず、魔法は2つある

者が使うイメージ。人間が使う呪文

者のイメージは、頭の良い者が、上位の者しか使えないらしい

俺が思うにイメージとは、自分が心の中でえがいた物、物の形や姿  
だったが…

この世界では、心の中でえがいた魔法を発動する。

因みに者は、人間を嫌っている

次に人間の魔法は、呪文と言って魔力を持っていれば、使えるらしい  
俺の仮説だが呪文とは、魔法を発動するに必要な言葉に魔力を交ぜ  
たもの。

因みに強さに例えると…

イメージ9割、呪文1割らしい

大体の所は合ってると思う

「木の棒は無いかな？」

試したい事があるから欲しいんだが…

「無いな」

仕方ない、木を折って作るしかないな

皆が寝てるから五月蠅くは出来ないから、少し離れた所に行こう

歩いて5分後…

此処らで良いだろ

木の棒つと、おっ丁度良さそうなのがあった。  
結構高いがこの身体能力なら…

「ジャンプで届くか？」

5mってとこだな

よし、じゃあ

「行くぜ」

ダンッ

真哉は木の棒に向かってジャンプして…

「取れた」

取れたが…

これって…

「跳びすぎじゃね？」

真哉は10m以上跳んでいた

「マジかよー」

真哉は叫びながら、落ちていったが…  
ドンッ

音だけで怪我也する事無く着地した

「怪我は無いが…」

自分の体なのに驚かされるぜ

まあ無事？木の棒が手に入った事だし、早速試して見るか

先ず木の棒を丸い棒になるまで風のナイフで削っていく

20分後…

「不恰好だが、出来たな」

俺が試したかったのは、手にしている物を魔法や魔力で強化出来るか、どうかを試したかった

「先ずは、魔力で試してみよう」

俺の魔力を木の棒に纏わせるイメージ

うーん…

「出来たが…これじゃあ魔力を無駄に消費してる様に見えるな」

木の棒は荒々しい青い魔力を纏っていた

「今度はもう少し具体的にイメージしてみるか」

木の棒の表面に魔力を薄く張り棒の中に魔力を詰めるイメージ  
例えるなら鉄パイプの中に鉄を詰める感じ

「これを…」

真哉は木の棒を木に向かって片手で振った。

ドゴッ

「威力凄えな」

木が木の棒で半分以上めり込んでいた

まあ強化は出来たから…

「後は発動の練習を繰り返して、言葉で発動出来る様にするか」

5分後…

「魔力強化」

出来た。イメージなら直ぐに出来たが…言葉にするのは少し難しいな  
魔力強化でコツを掴んだから、次は属性で強化をして見よう

30分後…

属性も出来たが魔力強化より難しいな。取り敢えず日も昇ってきた

から皆の所に戻りながら結果を考えるか先ず火の属性で強化すると木の棒が若干赤くなり、物に触れると燃えた

水の属性で強化すると木の棒が若干青くなり、水の膜を張った

土の属性で強化すると木の棒が若干茶色になり、土を纏った

風の属性で強化すると木の棒が若干緑色になり、風を纏った  
今はこの段階だが、もっと練習すれば進化する

真哉は確信しながら皆の所に戻って行った

## 14話（後書き）

読んで下りありがとうございました。



## 15話（前書き）

ギリギリ間に合いました

## 15話

おっシロは寝ているが、シルフィーは起きてるな。

「真哉、おはよう」

「ああ、おはよう」

「ところで、真哉は何処に行っていたんだよ？」

「魔力の練習に行ってた」

「へえ、どうゆう練習なんだよ？」

「手にした物を強くするから…強化…かな」

「強化出来たの？」

「出来るぜ…ほら」

俺は手にしていた木の棒に魔力を纏わせた

「凄い、強化するのは熟練者でも難しいのに。強化以外で他に練習したの？」

「いや、してない」

魔力を消しながら答えた

「そうなんだ。まあお疲れ様だよ」

「ああ。ところで、腹減らね？」

「うん、お腹空いたんだよ」

「よし、じゃあ飯にするか」「シロはどうするんだよ?」

「飯が出来たら起こす」

それか、匂いに誘われて起きるだろ

「分かったんだよ」

魔本を出して確認：魚を5k出せば良いだろ

「空間よ開け」

1mの空間をイメージ

ブーン

音を発しながら黒い空間が空中に現れた

先ず一匹手に取って、確かめると…

「目は濁って無いし、まだ少し生きてる」

空間の中はイメージした通りに止まっていた

「今日は全部焼くでしょう」

魚を綺麗にする事20分後：

「出来た。シルフィー昨日の薪は残ってるか?」

「残ってるんだよ」

あれか：

「火属性強化」

自作の棒に火の属性魔力を込める

「ま、真哉、属性強化も出来るの？」

「ああ、だが魔力強化と一緒にしないのか？」

「全然一緒じゃないんだよ、イメージだって難しいし魔力強化とは、桁違いに難しいんだよ？」

「そうなのか？確かに難しかったが、魔力強化でコツを掴んだから結構簡単と思っていたんだが…」

「因みにどれくらい難しいんだ？」

「ギルドランクで例えると魔力強化はCランクからだけど、属性強化はSランクだよ？」

「本当に桁違いだな。これも人前では使えないな」

「真哉って目立ちたい？」

「いや、俺はのんびり旅がしたいから目立ちたくない。それに目立つと利用されそうだから」

「確かに利用される可能性は高いんだよ。じゃあ私が人間を見極めてあげるんだよ。」

「確か者達は感覚で分かるって言ってたな」

「ありがとう、助かるよ」

「いえいえ」

「火の属性で強化した棒で薪に火を付ける」

「シルフィー、村まであとのくらいある？」

「うーん…歩いて1日だけど、真哉の走りで行くと…2、30分で着くんだよ」

まあ速さが電車並だらな…あつ重要な事忘れてた

「お金って、どうゆうの？」

「実物が無いから分かりにくいと思うよ？」

確かにそうだが、知らないよりは、ましだろ

「教えてくれ」

「分かったんだよ。」

種類は…

銅貨、銅板、銀貨、銀板、金貨、金板、白銀貨があるんだよ。

それから

銅貨10枚で銅板1枚、銅板10枚で銀貨1枚、銀貨10枚で銀板1枚、銀板10枚で金貨1枚、金貨10枚で金板1枚、金板10枚で白銀貨1枚になるんだよ。」

「長い説明ありがとう」

「いえいえ」

「因みに宿って最低いくらで泊まれる？」

「銅板1枚かな」

成る程大体分かった。日本円にすると銅貨〓 100、銅板〓 100  
0円、銀貨〓 1万円、銀板〓 10万円、金貨〓 100万円、金板〓  
1000万円、白銀貨〓 1億円だと思う

「真哉、焼けたよ」

「ああ、ありがとう」

シルフィーが焼けた魚を真哉に渡した

スンスン

キューイ？

「どうやら、シロも起きたようだな」

「そうだね。シロこっちにおいで」

キューイ

目を擦り、足をフラフラさせながらシルフィーの所に着いた

「はい、どうぞ」

キューイ

「俺達も食べようぜ？」

「うん」

「いただきます」

「いただきます」 キューイ

20分後…

「ごちそうさま」

「ごちそうさまでした」

キューイ

「少し休んだら、村に行こう」

「うん」

キューイ

5分後：

「そろそろ、行こうぜ？」

「分かったんだよ」

シルフィーは首飾りになり、俺は首飾りを付けた

シロを透明にして俺達以外見れないイメージ

「シロ、頭に乗ってくれ」

キューイ

「乗ったな。シロ落ちない様に掴まってるよ？」

キューイ

30分後：

おっまだ遠いが建物が見えるぞ

「シルフィー、あれか？」

（そうだよ）

此処からは、歩いて行こう（何で歩くんだよ？）

「いや、あの速さは不味いだろ？」

（確かに速すぎるけど、歩くのと関係あるの？）

「人前では、魔法を使えないふりをする」

（目立ちたくないから？）

やばい状況だったら使うがな

「ああ、悪いな我が儘で」

（大丈夫だよ）

「もし使ったとしても魔力位だけだな」

（魔力位ならあまり目立たないけど、使い過ぎると目立つんだよ？）

確かに、なら…

「魔法は使えないけど、魔力は多少使える旅人ってゆうのはどうだ？」

（多少なら大丈夫かな。だけど危険な状況だったら、私も出る）

「それはありがたいが、人間が居る時は極力出るなよ？」

（何で？）

何でって

「シルフィーは、人間が嫌いなんだろう？」

（嫌いだけど、真哉が傷ついて欲しくないんだよ）

涙が出そうな言葉だな

「ありがとう。じゃあ危険な時は手伝ってくれ」

出来るなら、俺が言って守りたいんだがな



(うん、任せるんだよ)

「その君、止まりなさい」

シルフィーと話している内に村の門番に話し掛けられた

や、やばい、シロが見えるのか？内心焦りながら…

「な、何ですか？」

答えた

「君は何者だ？」

君はって事は見えてない？「自分は旅人です」

「若いのに凄いな。ギルドカードは持っているか？」

見えてない様だな。怖えかなり焦った

(シルフィー、ギルドカードって持たないと駄目なのか？)

(大丈夫だよ。カードを持っていると見せるだけで入れるけど、持っていないと武器を預けないと入れないんだよ)

(教えてくれてありがとう)(いえいえ)

「ありがとうございます。ギルドカードは持って無いです」

「そうか。では、武器を預かるう」

棒って武器に入るのか？

「どうぞ」

「こ、これだけか？」

「はい。ファングと戦った時に剣を折ってしまつて」

真哉はファングの毛皮を見せながら言った

「成る程、それは大変だったな。村の入った右の方に武器屋がある、滞在するなら預かるようだがそこで毛皮と武器を交換して貰いなさい」

門番は村の右の方に指差しながら言った

「はい、教えてくれてありがとうございます」  
真哉は頭を下げながら言った

「おう」

村に入って…

木造の家しかないな。時代的には中世位だな…

「こんにちは」

「あつこんにちは」

村の人々も気さくに話してくれるし良い村だ

「おつこれが武器屋だな」そこには、剣の形に彫られた木の板が飾ってあり、中には武器が沢山並べてあった

早速入って見よう

少し見たただけだが…

「何か凄いな」

本とかで見た事はあるが、実物を見るのは初めてだなうん？誰かが俺に近づいてくる

「探し物は見つかったか？」

「いえ、まだ見つかりません」

真哉は後ろ向くと…

「何だ？俺の顔に何か付いてるのか？」

無精髭を生やし、左目に傷が付いた男が立っていた

「付いてませんよ。此処の亭主さんですか？」

「ああ。此処の村の武器屋をやってるガンデルってんだ、まあ宜し  
くな」

「はい。自分は田崎真哉です、真哉と呼んで下さい」

「おう、宜しく」

ガンデルは真哉に右手を差し出した

「宜しくお願いします」

真哉はガンデルの右手を握った

「で、何を探してるんだ？」

「あつその前に毛皮と武器を交換出来ますか？」

門番の人は出来るって言ってたけど、大丈夫か？

「出来るぞ。じゃあ毛皮を見せてくれ」

良かったあ

「どうぞ」

「ふむ……見た所傷も無し、質も良い。そうだなあ銀貨5枚までなら、武器と交換するぞ」

銀貨5枚って事は…5万！想像以上に高えな

「ありがとうございます。早速選んで良いですか？」

「ああ。ゆつくり選んでこい」

「はい」結構種類があるんだな。専門知識が無いから細かい所は分からんが、分かる物は…大剣、槍、ナイフ、片手剣、弓、ハンマー位で、後は槍に斧がくつついた物だったり、棒の先端にクリスタルが付いてる物だったり、細い剣とか分からない物があった

「うーん…これとこれで良いかな」

「決まったのか？」

「はい。これとこれを交換して下さい」

「槍とナイフ2本か…良いぞ後少し待ってろ」

「ありがとうございます」何だろう？

改めて見るとこの槍とナイフって両刃か。それに本物って何かずっしりくるな

「待たせたな」

「全然待つてないですよ」

「これをやるよ」

ガンデルが真哉に何かを投げた

「何ですかこれ？」

ベルトに少し似ているが違う。ベルトに小さいバックと、鞘が左右約10?20?30?と3つずつ付いていた

「それはラインと言って、冒険者や旅人が持っているかなり便利な物だぞ」

確かに便利だな。ナイフを普通に持っていたら危険人物になりそうだし、バックも付いてるから小物も入る「ありがとうございます」

「おう。またこの村に来たら俺の所に来いよ」

「はい。ありがとうございます」

真哉はガンデルに手を振りながら武器屋から出た

武器屋を出て門番の所に向かって数分後：

またガンデルさんに会いたいけど、いつ会えるか分からんな。この村の名前だけでも覚えて行こう

考えている内に門番の所に着いた

「あの一、門番さん」

「うん？おお君か、どうしたんだい？」

「此処の村の名前と近い行ける場所を教えて下さい」

「此処はカリイ村。確か…キャロル村が此処から近い筈だ」

カリイ村か。いつかまた来たいな

「分かりました。教えてくれてありがとう…」

カンカンカンカン

何だ？

「何の音ですか？」

「これは、あそこの高台に居る人が魔物が来た事を知らせる音だ」  
門番の人が村の中央の方を指を差しながら説明してくれた

あれか…大体2、30mって所だな

「君は下がっていなさい」

俺は見えてきた

「大丈夫ですよ、自分も戦えますから」  
交換した槍を構えながら言った

ファングか…いや、違うな周りにファングも居るが先頭に居る奴は  
周りのファングよりでかい

「しかし君はまだ子供…」

「来ますよ？」

「くっ怪我はするなよ」

門番も片手剣と盾を構えた

「分かってますよ。シロ村の中に居てくれ」  
俺は小声で言った  
キュイ

でけえな

「き、キングファングだと」

（キングファングって強いのか？）

（うん、まあ初心者には手強いんだよ。因みにランクはCランクだよ）

## 15話（後書き）

読んで下りありがとうございます



## 16話（前書き）

誤字があつたら指摘して下さい

## 16話

グルルル

（なあシルフィー、キングファングって俺を狙ってる？）

（うん、今にも攻撃して来そうだよ）

（何でだ？）

（多分だけど、仲間を殺されたから敵討ちに來たんじゃない？）

確かシロを襲っていたファングの事が

周りのファングは3匹…村の門番相手じゃキングファングは無理か…

「門番さんは、周りのファングを任せても良いですか？」

キングファングだと門番は死ぬ確率が高いし、それに人が目の前で死ぬのは見たくない

「それは良いが、君はどうするんだ？」

「自分はキングファングを相手にします」

門番の死ぬ確率を少しでも減らさないとな

「な、何を言ってるんだ君は、そんなの駄目に決まってるだろ」話して駄目なら…

「行くぞ」

ダッ

突っ込むしか無い

「あつ、君」

ガウ

ファングが門番を2匹で囲んだ

「はああああ」

俺はキングファングに攻撃しようとして…

ガウ

「ッ！」

攻撃を止め、後ろのファングの攻撃をバク宙で避けながら…

ザクッ

「先ずは1匹目」

槍でファングの頭を貫いた

「うわあああ」

まずいな、門番に2匹のファングが飛び付いている。なんとか盾で防いでいるが助けないとやばいな

真哉は左右の鞘からナイフを抜き…

「おらああ」

ブブンッ

両方のナイフをファングに向かって投げ…

ザクッザク

1匹目は頭に刺さり絶命。2匹目は心臓の辺りに刺さり真哉を睨んだ後に絶命した

ふう、なんとか助けられた「後はお前だけだ」

グルルル

真哉は槍を構え…

「行くぞ！」ダッ  
ガウッ

真哉とキングファングが同時に走り出し…

衝突する寸前にキングファングが右前足の爪で真哉に振り落としてきたが…

「っと」

真哉は横にジャンプして避け距離をとった

「流石キングファング普通のファングより速いな」

だが…まだ見えるし行ける

ふう、よし

ダッ

真哉は再びキングファングに向かって走り出した

キングファングは左前足を走ってくる真哉に振り落とそうとしたが…

「今度は俺から、だ！」

槍を右前足に向かって投げ…

ドスッ

ガッ

真哉の投げた槍がキングファングの右前足に刺さった。真哉は怯ん

でいる内に槍を直ぐに抜き眉間に槍を深く突き刺した

ガッ…ガル

ドスン

「はあ…はあ」

やべえ頭がクラクラする

「い、意識…が」

ボタン

（真哉？真哉大丈夫！？）

（悪いな…シルフィー。だけど…今は、少し…休ませてくれ）

（わ、分かったんだよ）

（ありが…と）

真哉は意識を失った

真哉が意識を失って数時間後…

「うつうん？」何処だ此処は？

（真哉！大丈夫！？）

（ああ、大丈夫だ。悪かったな心配かけて）

（うつうん、真哉が大丈夫なら平気だよ）

（ありがと。後此処は何処だ？）

宿の中か？

（いえいえ。此処はガンデルの家だよ）

ガンデルさんの家が…

コンコン

「入るぞーって寝てるか」

ガンデルさんの声だ

「あつ、はい」

ドンッ

俺が返事した瞬間にドアが壊れる勢いで開きガンデルさんが入って

来た

「お、起きたのか？怪我は無いか？」

「え、ええさつき起きた所で、怪我は無いですよ」

「良かったあ、いやー門番の野郎が走って俺の所に来て、少年がキングファングと戦ってるって聞いて急いで行って見たら真哉とキングファングが倒れてたからびっくりしたぜ」

「すいません、心配かけてしまつて」

ガンデルさんにも心配かけちまつたな

「いや、怪我が無いんなら良いんだが、真哉って凄えな」

何でだ？

「何で俺が凄いんですか？」

「だってよ1人でキングファングを倒しちまうんだぜ？それも無傷だから尚更凄い」

「いやー、俺に武術を教えてくれた人が良かったんですよ」

「だとしても傷の1つや2つは出来る。だから無傷で倒せたのはお前の実力だ」

実力って言われても、この世界に来て上がった身体能力もあるし、おじさんに武術を習って無かったら、いくらこの体が丈夫でも死んでたけど…

「そうなんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます」人に認めて貰うってなんか嬉しいな

「後渡したい物が2つある…先ずはこれだ」

ガンデルが真哉に渡した物は…

「ローブですか？」

全身を隠せる程の布製ローブで、色は黒だな。それにしても何でローブ？

「そうだが…説明する前に真哉は何歳だ？」

え？俺の年齢？まあ良いか「17歳です」

「何！俺は20歳位だと思っていたが…まあ良い説明の続きをしよう」

なんだったんだ？

「お願いします」

「ああ。ローブを渡したのは俺の予想以上に若かったが、その年齢でキングファングを倒せる奴はまず見た事、聞いた事が無いからな、他の奴らが聞いたら絶対にお前を利用する筈だ。」

だから年を聞いたのか。

それにしても教えて貰えて本当に良かった  
「教えてくれてありがとうございます」

「利用されるなんて嫌だろ？それに真哉はこの村の英雄だからな」

「確かに嫌ですね」

英雄？

「最後にこれを渡す」

ガンデルが真哉に渡した物は…

「皮袋？」

手のひらサイズの皮製の巾着だな

「ああ。少ないけどな」

少ない？まあとにかく開けて見よう。

皮袋の中身は…

「銀板！？しかも3枚も！」多い。俺的に30万は大金だし、全然  
少ないぞ

だけと何でだ？

「え、えーと…何ですか？」

「何でって、そりゃあ村を救ってくれたからだ」

村を救った？救った覚えが無いんだけど…

「あの一、村を救った覚えが無いんですが…」

「何言ってやがる、キングファングを倒したろ？」



「ええ倒しましたけど…」

それとどう関係があるんだ？

「このカリイ村には、ともに戦える奴が俺を含めて2人しか居ないんだ。例え倒せたとしても、村の7割は死んじまう。だから真哉はこの村を救ったも同然だし、英雄だ」

戦える人少なっ！。だけど…」

「え、英雄なんて大袈裟ですよ」

村を救ったのは良いんだが、流石に英雄は言い過ぎだと俺は思う

「そうか？」

「はい。ですから英雄は止めてください」

俺に英雄なんて似合わないしな

「まあ真哉が嫌なら止める。悪かったな」

「いえ、分かって貰えたならそれで良いですよ。」

真哉はベッドから降りながら言った

「もう動いて大丈夫なのか？」

「ええ。ベッド貸してくれてありがとうございました」

「大丈夫なら良いけどよ。次は何処に行くんだ？」

えーと、確か…」

「キャロル村に行こうと思います」

「キャロル村か…確かキャロル村の近くに鉱山があった気がするな」

鉱山か：掘った鉄とかで武器を作って貰えるのかな？「鉱山で掘った物で武器を作って貰えたりするんですか？」

「ああ、作って貰えるぞ。それに普通に買うより安いしな」

そうなんだ。じゃあキャロル村に着いたら宿に行ってから鉱山に行くしよう

「教えてくれてありがとうございます」

「おう。直ぐに出発するなら少し送って行くぜ」

「ありがとうございます」真哉はガンデルと一緒に家を出ると…

「英雄様だ」

「英雄様ー」

なんだなんだ？

「ガンデルさんどうゆうこと？」

「あーすまん。皆に説明するから少し待っててくれ」

「お願いします」

多分全員だが、カリイ村の人って50人位居るんだな  
村に入った時に少し見たがこんなに居ると思わなかった

「説明してきたぞ」

「えっ？あ、ありがとうございます」

考えてる内に説明が終わってたらしいな

「皆がお礼をしたいってよ」

「お礼って十分貰いましたよ？」

あんな大金貰ったしな

「他にもしたいらしいんだ」

「いや、大丈夫ですよ」

「それを皆の前で言えるか？」

「うっ」

言いづらい

「さあ、どうする？」

他にもって、別に…あっそうだ

「じゃあ俺を見送って貰えますか？」

図々しかったかな？

「まあ良いが…そんなんで良いのか？」

「はい。それで十分ですよ」

「分かった。皆にそう伝えてくる」

「じゃあ真哉気お付けてな」

「はい。ガンデルさんもお元気で」

「おう。」

結果から言つと図々しい願いを聞いてくれた

「村の皆さんもお元気で」

「はい」

「真哉様もお元気で」

「村を救って下さって本当にありがとうございました」

「またいつか会いましょう」

「はい。では、さよならー」

真哉は手を振りながら村を出た

## 16話（後書き）

読んで下さってありがとうございます

## 17話（前書き）

ギリギリ間に合いました

## 17話

村を出て5分後：

真哉は突然足を止めた

（どうしたの？）

キュイ？

「いや、村が心配でさ」

戦える人は少ないし、また魔物が来たらと思うと…

（確かに、私も感覚で感じたけどあの村に悪い人は1人も居なかったんだよ）

なら、尚更心配だな。しかしどうイメージすれば良いんだ？

（でかい盾とかで守れば良いんだけどね）

守る…

「それだ。」

（えっ？どうするの）

「キングファングと戦ったろ？」

（うん、でもそれと守るのとの関係があるの？）

「ああ。出来るか分からんが、キングファングの強さを思い出して、キングファングより弱い魔物はいれないのをイメージする」

確かキングファングはCランクだったから結構役に立つと思う

（なんだか凄いね）

「ああ。まあやってみるか」

（頑張つて）

「おう」

キングファングより弱い魔物はいれない透明の壁を村全体にイメージ

「凄え、透明だけど、壁が出来てるのが分かる」

村を囲う半円形の透明の壁が出来ていた

（これで少しは安心だね？）

「確かにそうだな。じゃあキャロル村に行こう」

本当ならもっと強い壁をイメージしたかったがな

（うん）

キュイ

ガンデルさんの話だと、キャロル村は確か…この道を真っ直ぐ進んで行けば着くって言うってたな

「これって道と言えるのか？」

（まあ田舎だからね。街や王国に行けば石畳で道が作ってあるよ）

「そ、そうか」

そうゆう事じゃないんだが…まあ中世位の時代にアスファルトは無い  
いか

「とにかくキャロル村に行こう」

周りが雑草だらけで、剥き出しの地面が道でも着けば良い



(うん)

キュイ

序でにローブでも羽織っとくでしょう

(もう着るの?)

「ああ。何時でも顔を隠せる様にな」

キュ?

(真哉って本当に目立つのが嫌いなんだね)

「まあな。それに人間ってのは、利用するだけ利用して捨てるって奴も居るしな」

だから容易に目立つ事はしたくない

(人間って怖いね)

「確かにそうだが、今は悪い奴の例えで、良い奴も居るから」  
俺が思うに…お人好しとかキュ…

(そうなの?)

「まあ、そうゆう奴等も居るって事だ。分かったか?」

(うん。分かったんだよ)

キューーイ

ガブッ!

シロは真哉の頭に噛み付いた

「いてえええええ」

シロが吼えた瞬間頭に急な激痛が襲った。俺は頭を押さえながら、イメージで痛みを消す

「ど、どうしたんだシロ?」あーびっくりしたし、凄え痛かった

キュキュイキュイ

やはり言葉は分からないが、シロがある方向を小さい手で差している

「何がある…」

うん？結構遠いが馬車の後ろを人が武器を持ちながら追っているの  
が見える

（真哉あれは盗賊だよ！）

「何っ！？」

だから武器を持つてるのかあの馬車が危ないな…

「助けるぞ。シロは木の陰に隠れていてくれ」

キュイ

（真哉大丈夫なの？）

走っている途中シルフィーが聞いてきた

「何がだ？」

（真哉は怖いんでしょう？）

「ああ、正直かなり怖い。今でも間違つて人を殺したらつて思うと、  
何かに押し潰されそうだ」

この世界に来てある程度は覚悟していたが、俺には人を殺す覚悟が  
今は無い…だが何時かは覚悟する必要がある

（そうだよね）

「何で分かったんだ？」

（真哉だつたら盗賊に絶対に勝てるけど、手が震えてる。それに真  
哉は魔物を倒した時に罪悪感を感じる優しい人だから）

俺を買い被り過ぎだな。手が震えてるの気付いてたのか…優しいの  
かは分からない。だが例え魔物が人間、者の共通の敵だとしても生

きてるのを殺すのは罪悪感を感じる

（私は真哉に無理をしてほしくないんだよ。私は仲間なんだから何時でも頼って欲しいんだよ）

「はあ」

（私じゃ、頼りない？）

「いや、違うんだ。こんな近くに頼れる存在が居るってのに、何で気付かなかったんだって思ってたさ」

本当に何でだろうな

（私は他者、他人から見て頼れる存在かは分からない。だけど、真哉の頼れる存在にはなりたい）

「他の奴等なんて関係無い。俺はシルフィーが頼れる存在だと今だが、やっと分かった…もし俺が壊れそうになったら頼っても良いか？」

（勿論だよ。私は何時までも真哉の味方だから）

「ありがとう」

初めてだな。こんな短時間で、誰かに頼るって言葉使ったのは

（いえいえ…本当に無理だけはしないでね？）

「ああ」

無理は出来るだけしない様にないな。それとシルフィーにあまり心配させない為にも、多少しか効果はないだろうが覚悟も必要だな

「あと少しだ」

（無理しない程度に頑張ってたね）

「ああ。分かってる」

バギィツ

なんだ？

「マジかよ。」

盗賊の野郎、斧を投げて馬車の片輪壊しやがって…こっちは覚悟を決めたばかりだぞ

行くしかないな。ロープで全身を隠し…

「すーはー」

深呼吸をして…よし、まずはジャンプして馬車と盗賊の間に入って、盗賊と戦おう

「ッ」

真哉は足に力を入れ勢いよく飛び出し…

「誰だ、てめえ？」

上手く馬車と盗賊の間に入り込んだ

誰だって言われても…

「通りすがりの旅人だ」

盗賊の数は…5人か

「ギャハハハ…お前正義の味方のつもりか？」

盗賊の先頭の奴が喋った

こいつ頭大丈夫か？

「旅人と言った筈だが？」

「俺らが襲うとしている奴を助けるんなら一緒だ」

一緒じゃない気がするの俺だけか？

（私は一緒じゃない気がするんだよ）

（そうだよな？）

良かった。シルフィーは俺と同じ事を考えていたようだ

（うん）

「まあ良い。楽しみが増えたからな」

楽しみ？どうゆう事だ？

「お前らは金が目当てじゃないのか？」

「それもあるが…俺は殺すのが一番楽しみなんだよ」ギリッ  
こいつ…

（真哉！、怒りに任せちゃ駄目だよ）

（…ああ。悪い）

俺は覚悟の事で迷ったが…こいつに覚悟は必要無いな

もう一度…

「何て言っただんだ？」

言ったら…

「聞こえなかったか？まあ良い。俺は人を殺すのが楽し…」

殺す！！

真哉は一瞬で盗賊の先頭の奴に近づき槍を薙ぐり、首から頭を切り

落とした

「か、頭―」

「頭が、殺られた」

「ば、化け物だ」

「俺は殺されたくない」

盗賊達は我先にと逃げて行った

（ま…）

「出るなよ、シルフィー。俺は大丈夫だから」

真哉は首飾りを優しく握りながらシルフィーに言った

（で、でも真哉は魔物を殺した時以上に罪悪感が出てる）

「大丈夫だ。あいつじゃなかったら、壊れてたかもしれないけどな」  
「だけど、俺は人を殺した事実は変わらない。結構辛いな」

「うっ」

（真哉！）

真哉が倒れ…

「大丈夫ですか？」

る前に誰かに支えられた

誰だ？

「ええ、少し疲れてるだけです。休めば大丈夫ですよ」

（大丈夫だ）

「では、私の馬車で休んで下さい。貴方は私の恩人なのでから  
て言う事は俺が助けた馬車の人が

「分かりました。少し肩を貸して貰えますか？」

「ええ。良いですよ」

真哉は馬車の人に支えられながら馬車の中に入った

「ありがとうございます」この馬車、外見は意外とでかいが、中は  
荷物が沢山あるな

「いえいえ。荷物が多くてすみません」

「いえ、大丈夫です」

「あっそうだ、少し待ってて下さい」

男の人は馬車から外に出ていき…

「荷物は弄らないで下さい」外から馬車に戻り俺に注意をしてから  
もう一度外に出ていった

「うーん、弄るなど言われると気になる…」

大事な物か？それとも危ない物か？まあ戻ってきたら、聞いてみよう

「お待たせしました。これをどうぞ」

「いえ、待ってないですよ。それは何ですか？」

金属製のコップは分かるが中身が分からん

「これはコープルと言う飲み物です。苦いですけど、気が休まりま

すから飲んで下さい」

「ありがとうございます」

「コーヒーみたいな色だな

「いただきます」

「苦いのは嫌いだから…」

「ええ、どうぞ」

ゴクッゴク

「一気に飲む」

「うっ、本当に苦い」

「お茶より苦い」

「確かに苦いですが、少しは気が休まる筈です」

「確かに少しは平気になったな」

「ええ。ありがとうございます」

「ですが、私は恩人にこの位しか出来ません。私は情けなく思います」

「いやいや、十分ですよ」

「貴方が十分でも、私は納得行きません。何かありませんか？」

「何かって言われても…うーん」

「真哉が周りを見渡す」

「そうだ。荷物は何か聞いてみよう」



「一つ良いですか？」

「ええ。良いですよ」

「ただ、本当に聞いても大丈夫か？」

「うーん…」

「どうしました？」

「えっ？あ、いや、荷物の事を聞いても良いですか？」 勢いで言  
つちまつたが大丈夫か？

「ええ。良いですが、その前に私の名前はセルードと申します。以  
後お見知り置きを」

セルードは右手を左胸の少し上に置き、お辞儀をした  
なんか執事みたいだな

「あつ自分は田崎真哉って言います。真哉って呼んで下さい」

真哉もお辞儀をした

「分かりました。荷物の事でしたね？」

「はい。そうですか…聞いても大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。この荷物は、私が仕えて…いる…」

黙り込んでどうしたんだ？まあ良いか。それにしても仕えているっ  
て事は…多分執事で合ってると思う。

「そうですよ！」

うおっ、びっくりした

「どうしたんですか？」

「真哉様、領主様に会っていただけませんか？」

領主って事は…

「貴族…ですか？」

「ええ。ですが私が仕えている領主様は普通の貴族とは違うんです。私達仕えている人達は家族の様に接してくれて、領内の民達には友人の様に接してくれる、優しい方なんです」

仕えているセルードさんが言うなら説得力はあるが、やはり信用は出来ないけど…

「分かりました。領主さんに会いましょう。ですがキャロル村に行っても良いですか？」

（シルフィー、その領主の所に行ったら調べてくれ）

（分かったんだよ）

（ありがとな）

（いえいえ）

「同じ方向ですから、大丈夫ですよ」

同じ方向なら良かった。鉱山を見てみたいからな

「では、行きましょう」

「えっ？ち、ちょっと待ってて下さい」

俺は慌てて外に出た。シロをどうやって呼べば…イメージで試して見よう

シロに俺の声が届くイメージ

「シロ聞こえるなら、直ぐに俺の所に来てくれ」

これで来なかったら、俺が直接行くしかないな

30秒後…

聞こえなかったかな？俺が行くし…うん？結構遠いが…

「来た」

良かったあ。イメージ成功…

「何が来たんです？」

やべっ

シロを俺とシルフィー以外見れないイメージ

「いや、なんでもないです。セルードさんはどうして此処に？」

「セルードでも良いですよ。此処に居るのは、真哉様が急に出て行ったんで」

成る程…

「いや、自分より年上なので…それと様は止めて下さい」

「では真哉さんで、これ以上は譲れません」

出来れば、さんも止めて欲しいんだが…

「分かりました」

「では、私は出発の支度をしてきますので、真哉さんも出発出来る

様でしたら、私に声をかけて下さい」

「分かりました」

セルードは真哉の返事を聞いて馬車に向かって行った

ふう、焦ったあ。シロは何処だ？

「シロー」

キューイ

真哉が呼んだ瞬間にシロは木の陰から飛び出し、真哉に向かって飛んだ

「シロ、呼ぶの遅れてごめんな？」

キューキューイ

シロは頭を横に振った

「ありがとな…それじゃ行こう」

（おー）

キューイ

「セルードさん、準備出来ました」  
馬って近くで見るとでかいんだな

「そうですか。では出発するので、馬車の中に入ってください」

「はい…じゃあお願いします」

「はい。」

真哉達はセルードの馬車でキャロル村に向かった

## 17話（後書き）

読んで下さってありがとうございます

## 18話（前書き）

前回より短いです。

## 18話

（シルフィー、セルードさんに何か感じる？）

（悪い物は感じないけど…セルードは今真哉に感謝してるって事が感覚的で分かるよ）

成る程…悪い物は感じないのなら、大丈夫そうだな

「セルードさん、キャロル村まで後どの位で、着きますか？」

「そうですね…このペースだと、後2、3時間位で着きますよ」

「そうですか…教えてくれてありがとうございます」後2、3時間か…それまで、どうするかな？

「いえいえ…あの、聞いても良いですか？」

セルードは少し迷いながら真哉に質問した

なんだろう？

「なんですか？」

「あの…真哉さんは、二つ名持ちなんですか？」セルードは意を決して真哉に言った

なんか、セルードさん目が真剣だな。それに二つ名持ちって言われても…

「どうゆう事です？」

（シルフィー、二つ名持ちって何だ？）



（二つ名持ちって言うのはギルドランクS以上が持つ異名だよ。因みに二つ名持ちは中級貴族以上、上級貴族以下の権利を持てるんだよ）

それじゃあ、セルードさんは俺がギルドランクS以上って勘違いしてる？

（教えてくれてありがとう）（いえいえ）

「いえ、違うんなら良いんですが…何でそんなに強いんですか？」  
今度は違う質問を真哉に言った

俺、石の力は出して無い筈だが…

「いや、自分って強いんですか？」

「はい。」即答ですか。多分今の俺は口が引きつっていると思う

「何故そう言えるんですか？」

本当に何でだ？気になる…

「少し話が長くなりますが良いですか？」

何で分かったのか気になるし…

「大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。私は領主様に仕える前はギルドで冒険者をしていました…」

へえ、セルードさんって冒険者だったんだ。全然面影が無いな

「私は、普通の人より強いと自信がありますが…」

自信があるって事はギルドランクは、俺が思うにBかAランクかな

「真哉さんが盗賊に攻撃した瞬間が、見えなかったんですよ。」

俺が攻撃した瞬間？あの時は怒っててよく覚えてないんだよねあ

「見間違いじゃないですか？」

自分でも苦しい言い訳だと思うが、もしかしたら…

「いいえ、真哉さんが盗賊に攻撃する瞬間を確かにこの目で見ました。私が見えない程の速さで」

やっぱり誤魔化せないか…まいったなあ…

（シルフィー、どうすれば良いと思う？）

（うーん…魔法使いと言うと目立つから、魔力を使っただけ言えば多分大丈夫だと思うんだよ）

確かに、魔法使いだと目立つよなあ…魔力を使っただけ言えば使える人も居るから大丈夫だな

（シルフィー、助かったぜ。何度もありがとな）

（いえいえ。役に立ったんなら良かったよ）

本当に助かったぜ

「どうしたんですか？まだ調子が悪いんですか？」

セルードは、真哉を心配な様子で聞いてきた

「あついえ、違います。あの時の事を言っただ丈夫か、考えていたんですよ」

「そうですか…違うなら良かったです。言えないのであれば、無理

には聞きませんよ?」

「言えるんで、大丈夫ですよ…あの時は、足に魔力を込めたんですよ」

確か魔力が扱えるランクはCだから、あまり問題は無いだろ

「魔力ですか…私は魔力を扱えないので、良く分かりませんが…魔法ではなく、魔力だけでも凄いですね。教えて下さりありがとうございます」

セルードさんは魔力を使えないのか

「いえいえ。…そうだ、良ければ領主さんの事を教えて貰っても良いですか?」

領主の事を聞けばどんな人かが少しは分かるだろ

「ええ。良いですよ。どんな事が知りたいですか?」

「うーん…では、領主さんは、どんな事に取り組んでいるんですか?」

「領主様は、リローン街での奴隷廃止に取り組んでいます」

奴隷ってこの世界にあるのかよ…領主はそれを廃止するんだから少なくとも悪人では無さそうだな。それに…

「あの、リローン街ってなんですか?」

「リローン街とは、簡単に言いますと、領主様の街です」

成る程、少しは情報が集まったな…後は会えば分かるだろ「そうで

すか…教えてくれてありがとうございます」

「いえいえ。…もう少しでキャロル村に着きますよ」  
結構話してみたいだな

「分かりました…セルードさんは、キャロル村に着いたら何をするんですか？」

「そうですね…まずは、馬車を預けてから、宿をとって先に休みます。勿論真哉さんの部屋もとおきます。真哉さんは何をするのですか？」

「自分は、一回鉾山に行つてきます。それと、部屋代を…」  
真哉は腰に付けている皮袋からお金を取り出そうとすると…

「いえ、私が払っておきますよ。真哉さんは私の恩人ですから」  
セルードは、真哉がお金を出す前に言った

そう言われてもな…

「ですが…」

「払わせて下さい。私にはこの位しか出来ないのですから」  
セルードは真剣な様子で真哉に言った

うーん…

「分かりました。では、お願いします」

「はい」

俺達が話していると…

「そこの馬車、止まるんだ」

門番に止められた

「はい？何でしょう？」

「ギルドカードを出せ、その後、馬車の中を調べるが良いな？」

なんか、うぜえなこの門番

「ギルドカードは出しますが、馬車の中は見せれません」

「なんだと？馬車の中が見せれないなら、出ていきなこいつ、ムカツク。」

「これを見てもですか？」

なんだ？セルードさんが服の中から紙を出したぞ？

「はっ、何を見せようってんだ」

「領主様の通行許可証です」

「うっ、嘘だ」

一気に動揺したな

「では、確認を」

門番は、セルードの渡した紙を恐る恐る確認すると…

読んでいく内に手が震え始め、顔も真っ青になり…

「ほ、本物だ…す、すいませんでした。どうか、どうか打ち首だけはお許しを」

一瞬で土下座をした

「いえ、分かって貰えれば良いですよ。通っても良いですよね？」

「は、はい。どうぞお通り下さい」

態度がかなり変わったな

門を通おると…

「うわー、カリイ村よりでかくて、活気があるな」

そこには、店が沢山あり、店に人が集まって商品の売り買いをしていた

「ええ、確かに此処キャラル村は普通の村よりでかいですね」

数えきれないが、キャラル村の大きさだと、600〜700人は入るな

「私は、馬車を預けて来ますので、あのエルダーの宿と書いてある宿の所に居て下さい」

セルードは、村の西の方を指差した

何処だ…あ、あつた

「分かりました」

「では、後程」

「はい」

セルードは西南へ、真哉は西に別れた

## 18話（後書き）

読んで下さってありがとうございます

## 19話（前書き）

修理が終わったので投稿します。遅れてすみませんでした



## 19話

エルダーの宿に着いたのは良いが…

「セルードさんが来るまで何して暇を潰せば良いんだ？」

（じゃあ離れすぎないように、近くの店を見てきたら？）

うん？

（俺って口に出してた？）

（うん。出てたよ）

マジかよ…シルフィーに気を使わしちまったな

（悪いな。気を使わして）

（大丈夫だよ）

（ありがとな。じゃあ近くの店を見よう）

（おー）

歩いて直ぐに…

（なんか歩く度に、色んな人から見られるんだが、何でだ？）

（ローブで全身を隠してるからだよ。街なら隠す人間も居るけど、村で隠す人間は少ないんだよ）

成る程…だけど、外す事は出来ないしな。まあ我慢しよう

（教えてくれてありがとな）

（いえいえ）

あつ、セルードさんの馬車に武器を置き忘れた。馬車の場所が分からんしな…金が勿体ないが、武器を買いうか…

「武器屋が分からん」

（歩いてる人に聞けば？）

（そうだな）

また口に出してたみたいだな

あの男性の人に聞いてみよう…

「あのーすいません？」

「は、はい」

なんか怯えてる？

「武器屋って何処にありますか？」

「あ、あつちにあります」

男性の人は、右の方を差した

何処…うん？あれだな。小さいが看板がある

「教えてくれてありがとうございます」

真哉は男性の人に頭を下げると…

「へっ？」

男性は呆気にとられた様子で固まった

さっきからどうしたんだろう？まあ良いか  
「それでは」

確か看板が…あつた、あれを目印に進めば着くだろ

看板を目指して5分後…

着いた

「早速入って見るか」

（良いのが見つかるの良いね？）

（ああ）

中に入ると…

うーん、外見はしっかりしてたんだが、中は汚ねえな。武器には埃が付いてるし、中も掃除してないな

「はあ、良いのが見つかるとは思えないな」

中は漢字の皿の形でよく見てないから分かんないけど…

（探せばあるかもよ？）

確かに、中は汚いがもしかしたら良いのがあるかもな

（そうしてみるよ。シルフィーも見つけるの手伝ってくれ）

（うん。）

分かった）

探して10分後…

「中々見つからんな」

（うーん…）

うん？

（どうしたシルフィー？）

（気になる物があつて…）

気になる物？

（何処だ？）

（えっと…あの壺の隣にある物なんだけど…）

壺の隣…あの布が被さっているのか？

（近くに行くか？）

（うん）

壺の所に着いたが…

（どうだ？）

（その前に真哉、目に魔力を集めて）

（？分かった）

目に青い魔力を集めるイメージ

目に魔力を集めた状態で布を見てみると…

「な、何だこれ」

（分かる？）

（ああ）

布の中に緑色の魔力を纏った槍の形が真哉の目には映っていた

だけど…

「何で魔力を目に集めただけで分かるんだ？」

（うーん、説明が難しいね…多分、魔力は魔力に反応するからだと思う。それと、目に集めてる魔力を解いた方が良いよ？）

（何でだ？結構便利だぜ。普通より遠くの方まで見れる…）

（長く目に魔力を集めると失明するよ？）

マジで！？イメージ解除

（だから、大事な事は先に言え！）

（ごめんなさい。）

（いや、分かって貰えれば良いんだ。怒鳴って悪かった）

（うん）

沈…黙

な、何か言おう…

（亭主さんは居ないのかな？）

先に言われた

（分からん。呼んでみよう）

「すいませーん、誰か居ますかー」

「は…い」

凄え小さい声。声の方向は…多分入り口から真っ直ぐの奥。行ってみよう

あれ？カウンターは、あるんだが、声の主が居ないな 「あの一、何処ですかー」

「此…で…」  
スンッ

声は、カウンターの下からだけど…泣いてる？

とにかく、近くに行ってみよう。えーと…居た

「大丈夫か？何処か痛いのか？」

「違、う…お、お父、さんが、鉾、山から、帰っ、て、来な、い」  
スンッスンッ

鉾山か…

「君のお母さんは？」

「病、気で、寝込、ん、でる」  
スンッスンッ

うーん…出来るか分からんが…

「お母さんの所に案内してくれる？」

「何、で？」  
スンッ

「お母さんの病気、治せると思う」  
（やっぱり、真哉は優しいね）

（うるせえ…シルフィーも手伝えよ？）

（クスツ分かったよ）

笑いやがって

「本当、に？」

「ああ、だから泣くな、な？」

「う、ん…お母さんの所に案内するから来て」

「おう、頼む」

言っただけには、成功させないとな

（シルフィー怪我や、病気を治す呪文を覚えてくれ）

（だけど、真哉はイメージが出来るでしょ？）

確かにそうだが…

（イメージは人間には使えない。

イメージは者達しか使えないし無言で治したら変だろ？）

（確かにそうだね…でも真哉は呪文の使い方知らないよ？）

（そうだけど、呪文の言葉だけ言って、後はイメージでやるから大丈夫だ）

本当なら魔法は、人前では使いたくないんだけど…  
まっ、姿は隠してるから大丈夫だろ

（成る程ね。分かったよ…確か、ヒール、これは怪我也治せるし体力も回復する。それに7割位はヒールで病氣も治せるよ）

（聞きたい事が2つある）

（何？）

（言葉はヒールだけか？）

（大体はそうだよ。言葉を付け加える人間も居るけどね）

大体がそうなら大丈夫だな…それに一番聞きたいのが…

（最後だが…7割はヒールで治せるって言ったが、残り3割は？）

7割の病気なら良いが…

（呪文では病気を取り除く方法が無いね。病気の場所が分かれば、イメージで取り除けるけど、分からなかったら無理だね）

もし3割だったらヤバイ。だけど…

（場所が分かれば良いんだよね？）

（そうだよ。）

「此処」

子供が止まり、目の前の木製の扉を指差した。

どうやら、着いたようだな（もし、3割の場合は取り除く方法を教えてくれ）

（分かったんだよ）

「開けて良いか？」

「うん」



俺が扉を開ける瞬間に…

「どうした？」

子供に上着の裾を掴まれた

「お母さんを…お母さんを、お願い、します」

子供は涙を堪えながら、真哉に言った

「ああ。終わったらすぐに呼ぶから、此处で少し待っていてくれ」

「うん」

よし、じゃあ行くか

真哉は扉を開け、中に入って扉を閉めた

中に入って…

殆ど何も無いし暗い…あるのはタンスとベッドか…

ゴホッゴホッ

今はそんなことを考えてる場合じゃないな…近くに行って体の具合を調べよう

見て分かるのは、顔が青白い事位か…

（真哉、私が調べるから何処かに触れて）

触れてって言われても…

（首飾りの状態でも分かるのか？）

（分かるけど、首飾りの状態だと真哉を通さないと分からないけどね）

成る程、だから調べるのに触れる必要があるのか

（触れるのは手でも良いよな？）

（うん、大丈夫だよ）

なら、布団から手を出そう

（どうだ？）

（待って……結構危ない状態だけど、これならヒールでも治るよ）

（本当か！？）

（うん、だけど結構危ないから早く治した方が良いよ）  
良かったあ

なら、早速…

「ヒール」

俺が触れてる人の、体力を回復し、病気が治るイメージ

真哉の触れてる人が、緑色に薄く光り、光りが消えたと思ったら次は、薄く白色に光り直ぐに消えた。

治ったのか？

「あのー大丈夫ですか？」

「スースー」

（寝てるね）

（ああ。だけど顔色も良くなつたし、咳も止まったから治つたよな？）

（うん、安静にしてれば、明日には動ける様になる筈だよ）

（そっか：なら子供を呼ぶか）  
早く安心させてやらないとな

（クスッ）

（何で笑つてんだ？）

（別に）

？まあ良いか。それより子供を呼ぶか

「おい、入って大丈夫だぞー」

子供が扉から少し顔を出し…

「あの、お母さんは、大丈夫？」

子供は不安気に言つた

「ああ。だから此方に来いよ」

真哉は手招きをしながら子供を呼んだ

「うん……お母さん？」

「今は安静にしていた方が良い。君は此処でお母さんを見てるんだ」

「お兄ちゃんは？」

俺は…

「鉾山で君のお父さんを探してくるから、君の名前とお父さんの名前を教えて欲しい」

「僕はダン、お父さんはガンテツだよ…それとお父さんをお願い」

ダンとガンテツさんか…

「おう、任せろ。だからダンはお母さんと待ってるんだぞ？」

「うん」

大丈夫そうだな。それじゃ行くとするか

真哉は扉を開け、外に出て行った

一回エルダーの宿に行こう。セルードさんが、待ってるかもしれないしな

宿に向かって数分後…

「あつ真哉さん、何処に行っていたんですか？」セルードは焦った表情で真哉に言った

やっぱり、心配かけちゃったな

「すいません。待たせてしまって…武器屋に行っていました」

「いえ、私は大丈夫ですが…どうして武器屋へ？」

「私用で行ってました。」

「そうですか…では、宿で休みますか？」

「いえ、まだ私用が残ってるので行つてきます」  
ダンの父親を探しに行かないとな

「そうですか…分かりました。では、気お付けて行つてらっしゃいませ」

「はい…すみません。折角宿を取って頂いたのに」

「大丈夫ですよ」

「そう言われても…」

「ですが…」

納得出来ないしなあ

「どうしても言うなら、敬語を止めて下さい。それで、無しにしますよ？」

「それで、良いのなら」

本当にそれで大丈夫なのか？

「ええ」

「分かった…これで良いか？」  
でも何故に敬語を？

「はい…やはり無理をしていましたね？」

「少しな」

何で分かったんだ？まあ良いか

それより急がないとな

「それじゃ行ってくる。宿の事は悪かった」

「いえ、大丈夫ですよ」

出来るだけ早く帰って来よう

真哉は村の北の方の山に向かって行った

## 19話（後書き）

読んで下さりありがとうございます

## 20話（前書き）

少し早く完成したので、投稿します

誤字が見付かったら、教えて下さい



## 20話

山に来たのは良いんだが…「鉾山って何処だ？」

（私には分から…あつ、あれに何か書いてない？）

何処だ？

「何処にあるんだ？」

（ほらっ、この坂の上にある木の看板に書いてあるよ）

あれか…

「よし、行ってみよう」

しかし、道が一本しか無いな…周りは木だらけだし道が無かったら、迷ってるぜ

（どうしたの？着いたよ）

おっと、考えてる内に着いたみたいだな

「ああ。教えてくれてありがとな」

（いえいえ）

えっと、何て書いてあるんだ？

「何々…此処から先2キロ地点に分かれ道があり、右に鉾山があつて、左が鍾乳洞か」

へえ鍾乳洞か…懐かしいな。後で見に行けたら行くか

（道が分かつたんなら、急ごうよ）

「そうだな」

出来るだけ急がないとな…走るか

走って数分後…

此処が看板に書いてあった分かれ道か…確か鉾山は右だったな

真哉が右に向くと…

「マジかよ」

一気に岩が剥き出しの道になってるな

精神的に辛い…まっ、考えてもしようがない

「ふう」

もう少し頑張ろう

（頑張って）

「おう」

岩剥き出しの道を走って数分後…

「おっ、結構でかい建物が見える」

ん？近くに人が集まっている…何かあったのか？

真哉はフードを深く被り顔を隠し、人が集まっている場所に向かった

集まっている人皆、ガタイが良いな

「何かあったんですか？」

近くの人に聞くと…

「ああ。何人かがドルーチェに噛まれたらしいんだ」  
焦った表情で言った

ドルーチェ？

（シルフィー、ドルーチェって何だ？）

（ドルーチェって言うのは石化を持つ蛇だよ）

蛇は分かったが、石化？

（石化って？）

（石化は、時間が経つと段々石になっていく、呪いだよ）

じゃあ、中に居る人はその呪いで…

（治す方法は？）

（石になつてたら、治せない。だけど、時間があまり経過してなければ、助ける方法はあるよ）

（そうか）

「ドルーチェに噛まれて、どの位経ちましたか？」

「そうだな…噛まれて3日って所だ」

「そうですか…」

（どうだ？）

（うーん…かなり危ないから、急いで治した方が良いね）

「噛まれた人の所へ案内して下さい」

「どうしてだ？」

「治せると思いますから」

「本当か!？」

驚きながら、真哉に詰め寄った

「え、ええ。ですが、早く治さないと危ないので…」

「分かった、じゃあ皆を退けてくる」

「あ、あれ？」

行っちゃったか…まあ良いとにかく治す方法をシルフィーに聞こう

(シルフィー、石化を治す呪文はあるか?)

(石化を治す呪文は無いね。イメージしか治せる方法が無いんだよ)

(そうか)

呪文は無しか…イメージで出来るのは良いんだが…

「皆を退けたぞ。早く来てくれ」

「あつ、はい」

フードは深く被って、顔を隠してるから呪文言わなくても大丈夫だろ

「噛まれた人は何人居るんですか？」

大人数だと助けられない人が出そうなんだが…

真哉は案内をしてくれてるガタイの良い人に聞いた

「2人だ」

2人か：大人数じゃなくて良かった。

「此処だ」

ガタイの良い人は目の前の鉄製の扉で止まった

ガタイの良い人は鉄製の扉を開け：

「出来るだけ早く右の奴を治してやってくれ」

こいつ、差別をするのか？「どうして？」俺は少し怒気を込めながら言った

「左の奴は知らんが、右の奴は、妻と息子が居るらしいんだ。だから早く治してやってくれ」

そうゆう事が：

「分かりました。頑張ってみます」

俺は石化になっている人達に近づき状態を見ると：

首から下は石になってる…：こりゃあ本当に早く治した方が良いな  
「見てないで早く治してやってくれよ」

「！」

居たのかよ…：はあびっくりした

「あの、少し離れ…」

あつ、そうだ

「何だ？」

「治すのに集中するので、部屋の外に居て下さい」  
これなら、呪文を言わなくても大丈夫だな

「そうゆう事なら、仕方ねえな。じゃっ、そいつら頼んだぜ？」

「はい」

ガタイの良い人は鉄製の扉を開け外に出て行った

「ふう」

よし、始めるか…

「まずは右の人から治したいけど、左の人も危ない状態なんだよな  
あ」

どうするか…

（一緒に治せば？）

一緒について言っただって…

「ん？」

…そうか！別にイメージは1人だけじゃなくても良いのか

（シルフィー、ありがとう）（いえいえ）

じゃっ、早速…

石化の治すイメージが分かんねえ…触れて確かめないと駄目だな

真哉は2人の間に入り、石の部分に触れた

うーん…何か、あまり石と変わらないんだな…イメージは、この石

を剥がす感じで大丈夫だよな？

うーん、試して見よう

まずは2人に触れて…

「ふう」

触れた所から石が剥がれるイメージ

石の部分だけに、白く光った瞬間に…

ピシッピシピシ

石に亀裂が走り、足から徐々に石が剥がれて行つた

（これで大丈夫なのか？上半身には石がある様だが…）  
真哉は少し不安気に、シルフィーに聞いた

（大丈夫だよ。上半身のは石が乗っかってるだけだよ）  
（そうか…）

「う、うん？」

「此処は？」

おつ、2人共起きたな

「此処は鉱山の手前の建物ですよ」

「だ、誰ですか？」

「そうか…」

誰って言われてもなあ…まあとにかく

「この格好で言うのもなんですが、怪しい人ではありません」

俺が思うに、最初に喋った左の人は、冒険者の初心者って感じで、妙に落ち着いてる右の人は、熟練者って感じだな

「あんたが助けてくれたのか？」

「石化を治したのは、自分ですが、運んだのは外に居る人達です」  
真哉の話を聞いた瞬間に…

「ええ！ぼ、僕石化になってたんですか！」初心者は驚き、大声で真哉に聞いた

うるせえな

「ええ。覚えて無いんですか？」

「は、はい…右足に激痛が走ったのは、分かったんですが、そこから記憶が無くて…」

成る程な…

「まあ、兎に角助けて貰ったんだ。先ずは…」

熟練者は立ち上がり…

「礼を言う」

真哉に向かって頭を下げた

「ぼ、僕も助けて貰い、ありがとうございました」

初心者は、慌てて立ち上がり、真哉に頭を下げた



「いえいえ。助かって良かったですよ」

そういえば、この2人は鉱山に入ってたから、もしかしたら…

「質問して良いですか？」

「ああ」

「何です？」

「鉱山の中でガンテツさんって聞いた事あります？」

「いえ、僕は分かりませんが…」

「ガンテツは俺だが、俺に何か用か？」

目の前にいたよ。まあ見付かったから良しとするか

「ええ。ダンが心配してましたよ」

「何っ！その前に何で、その名前を知ってるんだ？」

「まあ良いじゃないですか。それよりダンが心配してるので、帰りますよ？」

「…そうだな。ダンが心配してるなら、帰るよ。それと、礼をした  
いから、また武器屋に来てくれ」

ガンテツは、そう言い残し走って部屋を出て行った

「え？あの…」

「行っちゃいましたね」

「ええ」

そっだ

「質問して良いですか？」

「良いですよ」

「自分は訳あって名前は名乗れませんが、良ければ名前を教えてください」

「僕はリュウと言います。じゃあ何て呼べば良いですか？」

そっだなあ…うん？これで良いか

「では、クロと呼んで下さい」

「ローブの色と一緒にですね」

「ええ」

やっぱり気付いか

「他に質問ありますか？」

うーん、じゃあ…

「リュウさんは、鉱山で何をしてたんですか？」

「リュウで大丈夫ですよ。クエストで鉱山に行っていました」

クエストか…

「因みに何を？」

「確か…拳位の鉄鉱石を5つです」

「取れましたか？」

取れて無いなら、一緒に行きたいんだが…

「それが、取る前に石化になってしまったので…」

なら

「もし、良ければ一緒に鉱山に行って貰えますか？」

「えっ？良いですが…」

やはりトラウマか？

「自分弱いですよ？」

そっちなよ

「大丈夫ですよ、最初は誰でも弱いです。それに、サポートはしますから」

「じゃあ、宜しく願います」

リュウは真哉に右手を出した

「此方こそ」

真哉も右手を出し、リュウの右手を握った

「それじゃあ、少し…」

コンコン

誰だ？

「どうぞー」

鉄製の扉がゆっくり開き…

「あんだ凄えな。まさか本当に治しちまうとはな」

そこには、案内をしてくれたガタイの良い人が立っていた

「はい。治って良かったです」

「これから、何処に行くんだ？」

「少し休んだら、鉾山に行こうと…」

「はあ？鉾山にはドルーチェが居るんだぞ？」

分かってるさ

「大丈夫ですよ」

「大丈夫ですって…はあ、分かった。鉾山に行くんなら俺も着いて行く」

えっ？何故に？

「どうしてですか？」

「鉾山の中で道や、何が何処にあるか、知ってるのか？」  
「そうゆう事が…」

「では、お願いします」

「おう。俺の事はテツって呼んでくれ」

「はい。自分はクロと呼んで下さい」

「ぼ、僕はリュウと呼んで下さい」

「おう。じゃあ準備が出来たら外に出て来い。」

「分かりました」

テツは鉄製の扉を開け外に出て行った

## 20話（後書き）

読んで下さりありがとうございます

## 21話（前書き）

誤字がありましたら、教えてください

## 21話

さて、俺は元々準備は出来てるから良いが…

「リュウ、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫ですよ」

それなら…

「行きましよう」

「はい」

真哉とリュウは、鉄製の扉を開け外に出て行った

「早えな準備はもう済んだのか？」

まあ…

「自分は、元々準備出来てましたから」

「ぼ、僕も必要最低限の準備は出来たんですが、その…ピッケルを無くしてしまったので…」

あつ、そういえば俺もピッケルが無いな…

「それなら大丈夫だ。この建物の裏に倉庫があるから、その倉庫からピッケル持ってこい。まあ少しボロいがな」

俺の場合、無くても大丈夫だったが、あるんなら使わせて貰おう  
「では、お借りします」



「ぼ、僕も借ります」

俺はリュウと一緒に建物の裏に向かう時…

「おう。別に借りるんじゃないくて、貰っても大丈夫だぞー」

貰って大丈夫なんだ

「分かりましたー」

「はい」

俺達は返事をして、再び倉庫に向かった

おつ、あれか…倉庫の割には結構でかいな。あの高さは6メートル位あるぞ

「行かないんですか？」

「えっ？あつ、行きましょう」

倉庫を見て、止まってたのか

「はい」

「あれが、入り口ですかね？」

リュウは、困惑した様子で真哉に聞いた

「多分そうだと思いますよ」

2人の視線の先には、5メートルの所に一カ所だけ開いた窓があった

「僕、裏を見えます」

じゃあ俺は…

「よっ」脚に少しだけ力を込めて、窓に向かって跳んだ

「到着」

「クロさーん、何処に行っただんですかー」

「此処ですよー」

「えっ？ええー、ど、どうやったんですかー」

え！な、何か無いか…あつ、あつた

「今、持ってくるので、待ってて下さーい」

確か、ロープがこちら辺に…これだ。うん、長さも十分  
これを、柱に固く結び付ける。  
ミシシッ

…ま、まあ柱にロープが軽く、くい込む位が丁度良いよな

それより、このロープをリュウに…

「今、渡しますよー」

「はーい」

リュウは、ロープを掴んだが…

ん？

「どうしたんですかー」

「あ、あのー、引っ張って貰えますかー」  
そうゆう事が

「分かりましたー。しっかり、掴んで下さいよー」

「分かりましたー」

20秒後…

「ず、随分力持ちですね」

まあ、この世界に来てから身体能力が桁違いに上がったからな  
「ええ。それより、ピッケルを探しましょう」

「そうですね」

ここら辺は、ロープや、ランプだけみたいだな。階段が見付かった  
し、下に行くか

「自分は、下に行つてきます」

「様リユウに伝えると…」

「僕も行きます」

リユウと一緒に下に行く事になった

ギシッギシシ

この階段、大丈夫か？

「あれじゃないですか？」

「ん？」俺はリュウの指差した方向を見ると…

「確かに、ピッケルですね。では、早速持って行きましょう。テツさんも待ってますし」

「そうですね」

確かに、少しボロいが、贅沢は言えないな。それに、貰っても大丈夫って、言ってたし、5本位空間に入れておこう

「僕は1本しか持って行けませんけど、クロさんは、何本持って行くんですか？」

リュウは、苦笑いをしながら、真哉に聞いた

「自分は、2本持って行きます」

正確には、空間の中も合わせて、7本なんだけどな

「そうですね…まあ見付かった事ですし、テツさんの所に行きましよう」

確かにそうだな

「ええ」

俺達は階段を登った

「誰が最初に降ります？」

俺には少しやる事があるから…

「先に降りても大丈夫ですよ」

「そうですか…じゃあお先に」

「ええ」

リュウは、ロープを使ってゆっくり降りて行った

数分後…

「クロさん、次良いですよー」

じゃあ俺は、ロープを切ろう。俺には必要ないし、誰かに荒らされるのは、嫌だしな  
俺はロープに近づき…

「風よ」

風のナイフで、ロープを切り、窓からジャンプした

「ええー！」

ドンッ

地面から鈍い音を発しながら真哉は着地した

「クロさん、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫ですよ」

真哉は、何事も無かったような様子で言った

「そ、そうですか…と、兎に角テツさんの所に行きましょう」  
「そうしましょう」

俺達は、テツさんの所に向かって行つた…

「おつ、持って来たな。じゃあ出発するか」

「はい」

「は、はい」

リュウは緊張してるのか…「リュウ、自分やテツさんが居ます。それに魔物が出たら一緒に戦うので大丈夫ですよ」

「あ、ありがとうございます」

（あれ？サポートじゃなかったの？）

（確かに、サポートだけにしようと思ったが、手が震えてるのを見ると、な）

（ふふつ、真哉らしいね）

（何だよ、俺ら…しい…って…あー！！）

（ど、どうしたの？）

（シ、シロを馬車の中に忘れて来ちゃった）

（それなら、私が行ってくるよ）

（だけど…）

（良いから、真哉は鉾山で頑張つて）

（うーん…分かった。じゃあシロを頼む）

（うん、任せて）

「クロさん、何か光ってませんか？」

やべえ

シルフィーを俺とシロ以外見れないイメージ

「じゃあ、行ってくるね」

シルフィーは、小声で真哉に言ってから、飛んで行った

「あれ？」

「み、見間違いですよ」

焦ったあ

「そうなのかなあ……」

「おい、早く来ーい、置いて行っちまうぞー」

「それより、急ぎましょう。置いて行かれてしまいますよ？」

「そう、ですね。置いて行かれるのは、困りますしね」

真哉とリュウは、テツの所まで、走って行った

テツの所に着いたら……

「まったく、鉱山の中でそうゆうのは、無しにしてくれよ？」

少し注意された

確かに、鉱山の中ではぐれたら、やばいよな

「はい」

「ごめんなさい」

「分かれば良い。じゃあ行くぞ」

短い間だが世話になるわけだから…

「宜しく願います」

挨拶位はしとこう

「お、願います」

「おう。道案内は、俺に任せろ。」

鉱山の入り口に着いて…

「一様注意事項を言わせて貰うが、質問は俺が、言い終わったらにしてくれ」

「分かりました」

異世界の鉱山に何があるか、分からないから助かるぜ

「はい」

「先ず、絶対にはぐれるな。これが1つ目。次に、鉱山の中にあるクリスタルや、鉱石には、触れるな。これが2つ目。最後に出来るだけ俺の指示に従ってくれ。この3つは覚えていてくれ…質問はあるか？」

「じゃあ…」



「質問良いですか？」

「ああ」

「注意事項の1つ目は、分かったんですが、2つ目と3つ目はどうゆう事ですか？」

「先ず、2つ目の方から説明する。2つ目のクリスタルや、鉱石に触れるなつてのは、危険だからだ」

「危険、ですか？」

「何でだ？」

「そうだ。知識があるんなら別だが…クリスタルや、鉱石には、色んな種類があるのは知ってるよな？」

「えっ？ええ。まあ少し」

詳しくは無いが、地球と一緒になら、少しは分かる

「一般人でも知ってる、鉱石、魔石、クリスタルとは、違う物が鉱山にはあるんだが、まあ魔石は殆んど見付からないな」

魔石ってなんだ？

「あのー、魔石って何ですか？」

「うーん、俺もよくは知らないが、確か…魔石を使えば魔法使いや、魔術師の魔力が回復出来るんだとよ」

へえ、意外と便利な物もあるんだな

「まあ、魔石は普通の石ころや、鉱石と形が一緒だから熟練者でも

見分けがつかないんだと。それに、魔石はかなり高額らしいぜ?」

高額か…

「因みにどれくらい何でしょうか?」

「質によつて違うが、確か…最低でも銀板1枚で、最高が金板数枚つて聞いた事がある」

マジで!魔石つて最低でも10万はするのかよ。しかも最高が数千万つて…

「す、凄いですね」

「ああ。だから、魔石を狙う奴等が増えて、鉱山で死ぬ奴も多くなつてきてる」

そうなのか…

「何か、勿体無いですね」

「勿体無い?」

「ええ。命があつてこそじゃないですか。確かにお金は魅力的ですが、そこで、死んだら終わりですよ」

そう。死んだら終わり…俺は、待つてくれる奴等が居る。だから奴等を残しては死ねない

真哉は、固く決意した

「ふっ、ふははははは」

むっ…

「何で、笑ってるんですか？」

真哉は、少し怒気を含めてテツに言った

「いやー、すまん、すまん。しっかし、クロの言う通りだ。確かに、命あつてこそだし、死んだら終わりだ。これを魔石を狙ってる奴等に聞かせてやりてえな」

「ええ。そうですね」

聞く耳を持つかは分らんけどな

「あの一、出来れば説明の続きを…」

リュウが少し手を上げながらテツに言った

「ああ、そうだったな。確か…鉱石や、クリスタルには色んな種類があるから、知識がないなら危険だから触るなって所だよな？」

俺、覚えてねえ

「ええ。そうですよ」

リュウは、よく覚えてたな

「まあ、何故危険かと言うと、鉱石や、クリスタルには、色んな種類があるんだ。例えば、毒や麻痺を含んだ物だつてあるし、触れれば爆発つて物もある…」

そんなに、危ない物もあるのか

「そして此处で、3つ目の注意事項が出てくる。怪我をしたくないなら、俺の指示に従ってくれて言う事だ」

成る程：

「質問に答えて下りありがとうございました」

「おう。もう質問は無いか？」

「自分は、無いです」

俺は、答えて貰ったが一樣言っところ

「僕もありません」

「そうか…じゃあ、鉾山の中に行くぞ？」

「はい」

初めて、入るから少し緊張するなあ

「ええ」

リュウの、震えは少し消えたみたいだな

## 21話（後書き）

9月に忙しくなるので、更新が出来なくなる可能性があります。出来るだけ更新を頑張ります。

## 22話（前書き）

なんとか完成したので、投稿します。遅れてすいませんでした

## 22話

鉱山の中に入って数分後：「そろそろ、明かりを点けよう」

まだ明るいが、この先何があるか分からないしテツさんの言う通りにしよう

「ええ」

「えっ？まだ明るいですよ？」

リュウは、準備してるテツに質問した

「確かにまだ明るいが、この先一気に暗くなる。それに、油断すると奴等みたいになるぞ？」

テツはランプを持ち、ある方向を指差した

ん？骸骨か：

「ひっ」

リュウは、震えながら真哉のロープの裾を掴んだ

「油断をしなければ大丈夫ですよ」

俺はリュウの、肩を軽く叩きながら励ました

「そう、ですよね？」

「ええ」

「ありがとう、ございます。この鉱山で何回か見たんですが、やはり骸骨を、見ると、あ、足が震えて…」

こりゃあ精神が不安定になってる。少し休ませよう

「それ以上は、いいですから少し休んで下さい」

「すい、ません。そうします」リュウは、骸骨から離れた岩に腰掛けた

「テツさん、ちょっと良いですか？」

「ああ」

俺はテツさんを、リュウから離れた所に呼んだ

リュウの事なんだが…

「どう思います？」

「正直、あの状態だと危険だな」

やはり、な

「今日は、引き返した方が…」

「いえ、大丈夫です」

「！」

びっくりしたあ。敵意や殺気が無かったから気付けなかった

「本当に大丈夫なんだな？」テツは、リュウに詰め寄った

「ええ。もう大丈夫です」



「次に俺や、クロが危険と判断したら引き返すからな?」  
テツはリュウを睨みながら言った

「ええ。大丈夫です」

リュウもテツを睨み返した

「ふんっ、まあ良いだろう。じゃあ出発だ」

テツは鼻を鳴らし、再び鉾山の奥え向かった

「本当に大丈夫なんですか?」

真哉がリュウに問うと…

「ええ、本当に大丈夫です。心配してくれて、ありがとうございます」  
す

うーん、まあ…

「大丈夫なら、良いですが…では、テツさんを追いかけましょう」

「はい」

俺達はテツを追いかけた

鉾山に入って20分後…

何か、段々狭くなってきたし、岩も剥き出しになってきたな。最初  
は進み易かったが…

ん? テツさんが止まった?

「テツさん、どうしたんですか?」

「何か妙だ」

妙？

「どうゆう事です？」

「いや、此処まで鉱山の奥に来れば魔物が現れる筈なんだが…」

「そう言えば、そうですね」リュウは、テツの言葉に同意した

うーん、俺にはよく分からんが…

（真哉、シロ見つけたよー）

「！」

「クロさん、どうしたんですか？」

「いえ、何でもないです」

はあー、心臓が止まるかと思った。それにしても…

（何で、首飾りをしてないのに、シルフィーの声が聞こえるんだ？）

（実は、首飾りをしなくても契約をしたから、声が届くんだよ）

そうなんだ…

（シロは？）

（まだ寝てるよ。真哉は大丈夫？）

そうか

（俺は大丈夫、帰ったら何か美味しい物を食べようぜ？）

（本当に！約束だよ？）

（ああ、約束だ）

（うん！じゃあ楽しみに待ってるね？）

（あいよ）

ふっ、一気に声のトーンが上がったな

「クロはどうすんだ？」

テツが真哉に問いかけた…

「えっ？」

話し聞いて無かったあ

「なんだ？話し聞いて無かったのか？」

「はい、すいません」

完全に俺が悪いよなあ

「まあ良い、もう一度言っぞ？」

「はい、お願いします」

「俺は、嫌な感じがするから、引き返した方が良いと思うんだが…」

「いいえ、もう少しだけ進みましょう」

「そうゆう事ですか…」

テツさんは、引き返した方が良いと思ってるが、リュウは逆に進みたいと思ってる。で、テツさんは、俺に決めて貰おうとしたのか

「うーん、テツさんに聞きますが…」

「なんだ？」

「鉄鉱石が取れる場所はあと、どれ位ですか？」

取れる距離によって、進むか、引き返すかが、決まる

「そうだな…あと、数分つて所だ」

数分つて所か…

「それなら、進みましょう。で、目的の物が取れたら、急いで引き返しましょう」

「はい！」

リュウは、元気に返事をした

「クロが、そう言うなら…」テツは、少し迷った様子だが、クロに同意した

テツさんに、悪い事したかなあ？とりあえず…

「すいませんテツさん」

謝ろう

「いや、クロが謝る必要は無い…兎に角決まったんだ。行こうぜ？」

「ええ」

「はい。行きましょう」

数分後…

さらに岩の剥き出しが目立ってきた。それに、此処ってかなり広い…半円のドーム形で高さ約40メートル端から端は約300メートル

って所か

「あれだ」

テツは、ランプで照らしながら左の方向を指差した

ん？あの一カ所だけ色が違う部分か？

「色が少し違う部分ですか？」

リュウは、テツに聞くと…

「ああ。だが気お付けろ、此処で死んだ奴は少くない」テツは、真剣な様子で答えた

確かに、此処は骸骨が多い。本気で頑張ろう

先ずは…

目で危険な物を見分けるイメージすると…

「おいおい…」

殆んどが危険な物って、マジかよ…赤、紫、黄色に光ってるのが危険って分かるが、光って無い黒は何だ？

「此処を掘ろう」

うん？テツさんの声？

「リュウは、少し離れてろ」

テツが持つてるピッケルで紫色の部分を…

ちよっ！

「ま、待って下さい！」

ガキンッ

「な、何だよクロ、掘る直前に驚かすんじゃないよ」

あつぶねえ、もう少し左だったら、紫色の所に当たってたぞ。それと…

「ですが、そこは危険ですので…」  
注意しとかないと

「何でクロは、此処が危険だと分かるんだ？」

うーん、顔は分からなくても、教えるのはなあ…  
「勘、では駄目ですか？」

「それは無理がある…言いたく無いのか？」  
前半は苦笑いをして、後半は少し真剣な様子で俺に聞いてきた

やはり、無理があるよなあ。それに…  
「出来れば、言いたく無いです」俺が答えた瞬間…

「クロさんは、魔法使いじゃないですよね？」

確かに魔法は使えるけど、正式な魔法使いじゃないから…

「ええ。魔法は使えますけど、魔法使いではありません。自分は旅人なので」

「そうですか…もし、ギルドに入るんでしたら、魔法使いに注意して下さい。魔法使いの殆んどが高慢で、何時も威張ったり、人を見下す事しかしません」

と言う事は…

「リュウは、何か言われましたか？」

「ええ。お前…」

「いえ、言わなくて良いです。取り敢えず、クエストを終わらせましょう」

けっ、魔法使いつてのは屑が多いらしいな

「はい」

「テツさん、自分が掘るので、下がって貰えますか？」

「だが…」

「お願いします」

俺はテツさんの言葉を遮り、テツさんの目をジッと見た

「うーん…分かった。だが怪我はするな。それと、分からない事があつたら俺に聞け、良いな？」

「はい」

なら、早速質問を…

「危険な鉱石は、鉱石に当てなければ良いんですよ？」

光って無い部分の鉱石を掘りながらテツに聞いた

「ああ。それに、危険な鉱石には色があるんだ。爆発なら、赤、麻痺なら黄色つてな」

成る程…うん？緑？

「テ、テツさん？」

「どうした？」

光って無いから大丈夫な筈だけど…

「これって大丈夫なんですか？」

緑色の鉱石を指差しながら、言った

「ほう、こいつは珍しい」

どうゆう事だ？

「この鉱石は一体何ですか？」

俺は気になり、テツさんに聞くと…

「これは、ヒール石と言って魔石の一種だ…」

ヒール石って事は、使えば傷が治るな。せれに魔石の一種か

「取り出して、よく見せてくれ」

「分かりました」

初めての魔石だ。慎重に掘ろう

5分後…

うーん、もう少しで掘れるんだが…

「クロさん、どうしたんですか？」

リュウは俺の動きが止まったのを見て、少し迷いながら聞いてきた



「それが、もう少しで掘り出せるんですけど…テツさんは何処に？」  
いつの間に行っただ？」

「テツさんは、クロさんが掘ってる間に他の場所を見てくるって言  
って、少し前に行きましたよ」

「そう、ですか」

他の場所に言ったのか。それなら…

「呼んで来ましょうか？」

「いえ、呼ぶんではなくテツさんの様子を見て来て下さい」

その間に赤の鉱石を取り除こう。リュウには、怪我させたくないか  
らな

「分かりました」

リュウは返事し、離れて行った

「赤の鉱石に当てなければ爆発はしないだったよな…ふう」

俺は体の力を抜き考えた。

ヒール石を掘り出すには、先ず、この赤い鉱石を取り除かなければ  
ならない。

だが取り除くには、ピッケルで当てない様にして慎重に取り除かな  
いと爆発、か…

「待てよ…」

当てなければ良いんだろ…それなら空間に入れば問題は無い筈だ

「早速試そう」

……駄目だ。上手くイメージ出来ねえ。どうイメージすれば……おっ、これなら……

イメージ

「手で触れた物を直接空間に送る」

声に出す必要は無いが、まあ何となくだ

そして、赤い鉱石に触れると……一瞬で目の前から赤く光ってた物が消えた

「何か面白れえ」

俺は調子に乗り、次々に光ってる物を空間に送って行った。結果……

「調子に乗り過ぎて、穴だらけになっちまった」

穴だらけなのは、無視の方向で……

「取り敢えず、ヒール石発掘の続きをしよう」

数分後……

危険な鉱石を無くしたからヒール石が簡単に取れた

「それにしても、このヒール石って凄く綺麗だな」

大きさは、テニスボール位で形は凸凹だが、透き通った緑色のクリスタルの様だ

うん？後ろに人の気配って事はテツさん達か？

「一樣調べよう」

俺は五感の1つ聴覚に集中すると…

ココンツココンツココンツ

2人分の足音が聞こえ…

「はっはっは、どうやら俺の勝ちだな」

ふう。テツさんの声だから近くにリュウも居る筈。それにしても何を競ってたんだ？

「ぼ、僕はこうゆう事には、苦手なんですよ」

確かにリュウの声だが…

「リュウよ、それは負け惜しみと言っやつたぞ？」

おっと、呆れてつい声に出しちゃった。それに…

「鉄鉱石やヒール石も取れたし、此方から合流するでしょう」  
音のした方向は、確か来た道の方だったな

俺は合流するために、歩こうとした瞬間に…

ドシンツドシンツ

「何だ？地…」

いや、この明確な敵意は魔物か…この敵意、キングファングより圧倒的に強い

「何でしょう？」

「さあ、どっか崩れてるんじゃないの？」

本当に崩れてるだけなら、良いんだがな。それより避難させないと…

ドシンツドシンツ

ちっ、もう少しで此処に着いちまう

「直ぐに避難して下さい」テツさん達を戦闘に巻き込む訳にはいかない

「どうしたんだクロ？そんなに焦って…」

「いいから直ぐに避難を…」

ドシンツドシンツ

着くの速すぎだろ

「な、何ですか、あ、あれ」

リュウは腰を抜き、腰を抜かした状態で魔物を指差した

「おいおい、何の冗談だ…」

グオ？オ？オ？オ？オオオオオオ

「…ゴ、ゴーレム」

そこには、8メートル以上ある岩の塊が腕を上げ、咆哮した

## 22話（後書き）

読んで下りありがとうございます

## 23話（前書き）

更新遅れてしまいすいませんでした。12月まで忙しいので、更新が遅れる事があります

## 23話

早く逃がさねえと、マジでヤバイ

「早く避難して下さい！」

「だが、クロはどうすんだよ!？」

俺は…

「あいつと戦って時間を稼ぎますので、その間に逃げて下さい」

真哉はゴーレムを指差し説明した

「無茶だ、ゴーレムをたった一人で相手出来る訳が無え。それに…」

グオ?オ?オオオオ

ゴーレムが腕を真哉達の所に…

「ッ!」

ドッガーンッ

振り落とした

危ねえ、俺がもう少し助けるのが遅れてたら、2人共死んでたな

「あ、ああ…」

リュウは気を失ったか

「早く行け!」

「だから、お前一人じゃ…」

はあ、もう良い。このままじゃ埒が明かねえし…

「水よ」

2人の全身を息が出来る水の玉に閉じ込め、壁に当たると水が破裂するイメージ

「おい、何だゴボゴボ…」

「じゃあな」

真哉は小さい声で呟き、水の玉を出入口の方に蹴った瞬間…

オオオオオ

ゴーレムは蹴りを放つが…

「おっと、最後まで見送らせろよ」

真哉はゴーレムの蹴りを避けた

「つたく、まだやり残しがあるってのに…」

「土よ」

出入口を硬い岩で塞ぐイメージ

これで、良しつと…

「さあて、次は俺から行くぜ」

先ずは、小手調べ…

「火よ」

ダイナマイトの威力と同等の丸い火の玉を4つ空中に浮かせ…



「行け」

胴体を中心に火の玉が当たるのをイメージ

ドドドドッ

ゴーレムに火の玉が当たり土煙を上げゴーレムが見えなくなった

「これで、倒れてくれれば有難いんだが…ッ！」

俺は咄嗟に魔力を腕に覆い魔力で覆った腕を交差し黒い何かから体を守ったが…

ビキッ

「ぐっ」

足で地面を削りながら…

ドンッ

「ぐふっ、ごほっごほ…あー痛え」

壁にぶつかり止まった

「まったく両腕に輝が入ったぜ」

両腕の輝が治るイメージ…

両腕が薄く緑色に光った

「よし、動かせる。魔力で覆ってなかったら、確実に折れてたな。それにあの黒い物は一体…」

俺は両腕が動く事を確認して、ゴーレムの方に向くと…

「成る程、俺は殴られたのか…」

黒いのは、影か

ゴーレムは殴った後の体勢で止まっていた  
それにしても…

「4つ分のダイナマイトで、あれかよ」  
人で言う、肩、首の一部が挟れていて、一番酷くても胸板に軽くク  
レーターが出来てる位だ

グオ？オ？オ？オ？オオオオオオ

ゴゴゴゴゴッ

「何だ？」

石や岩がゴーレムに吸い込まれてく？

「おいおい、再生するのかよ」  
こりゃあ骨が折れるな

オ？オ？オオオオ

「再生が終わったら早速攻撃かつ」  
真哉はゴーレムの右手を跳んで避けたが…

「何っ！」

突然ゴーレムの右手が複数個の岩に分裂し、跳んで避けてる真哉を  
岩で囲み…

「くそっ」

俺は汚い言葉を吐きながら魔力を全身に纏うイメージをした  
魔力を纏った瞬間、岩が右手に戻り真哉の頭から下を掴んだ

ピシッビキッ

「ぐっ、ぐう」

身体中からイヤな音が聞こえてくる

遂には…バギッガリッ

「がっ、ああああああああ」

ゴーレムは掴んでた真哉を投げ飛ばした

ドンッ、ドドン、ザザー

真哉は地面に叩き付けられ、何回もバウンドし、地面を滑り仰向けの状態で止まった

「ぐっ、はぁ…はぁ」

俺は死ぬのか？

ゴーレムは両手を組み合わせ…

これで死ぬみたいだな

ゆっくり両手が上がっていき…

「はぁ…」

シルフィーとシロと俺で美味しい物食いに起こうと、約束したんだが…

真哉に向かって振り落とした…

シルフィー、シロ悪いな…

「約束…守れそう、に無い」俺は目を瞑り死を待った

…がいくら待っても、傷は痛むし、殺られた気がしない、俺は目を開けると…

「どう、なっ、てんだ？」

ゴーレムの動きが止まって…いや、時間が止まってる？『諦めるのですか？』

透き通る様な響く声が聞こえた

「誰、だ？」

俺は聞くが…

『もう一度聞きます。諦めるのですか？』

無視し、同じ質問をしてきた

この際誰でも良いか

「この状態、じゃあ、どう、しょうも…」

『質問を変えましょう。約束の事はどうするのですか？』

約束…待てよ

「何故、それを…」

『何故知ってるのかは、後で答えましょう。今は私の質問に答えて下さい』

後で答えるって言うてるしまあ、良いか…

「今、すぐにでも、ゴーレムを、倒して、シロや、シルフィーと、美味しい物を、食いに行きたいさ…」

この時間が止まってる間にでも倒したいが、体が動かねえし、イメージも出来ねえ

『その気持ちは、変わらないのですね？』

そんなの決まってる…

「当、たり、前、だ」

『ふふつ、そうですか…では、最初の質問に戻ります』

俺は、何故笑うんだと、聞きたいが止める事にした

『貴方は諦めるのですか？』

この状態じゃあ、どうしようもないが…

「俺に、まだ力が、残ってる、なら…諦めたくない！」

俺は力強く答えると…

『その言葉を待っていました。では、私が貴方の枷を外しましょう』

枷？

「どうゆう、事だ」

『ゴーレムを倒したら話します』

「分かつ、た」

カチリ

俺が答えた後に鍵が開く様な音がして、体に異変が起きた

「凄いな」

体の奥底から力が満ち溢れ、傷が治っていく

「よっ」

俺は立ち上がり、両手を開いたり閉じたりをしながら、全身を調べた

「全部治ってる」

全身殆どの骨が砕けてたのに、一瞬で治った

『ええ。貴方の枷を2つ外しました…』

俺って枷が2つあったのか。1つは多分再生と、分かるがもう1つは？

『この戦闘が終われば、もう1つ外します』

まだあるのか！？…一体俺に何個の枷が付いてるんだ？

『では、頑張ってください』

「お、おい」

待てよと、言う前に…

オ？オ？オオオ

時間が進み、ゴーレムの咆哮に遮られた体が治ったのは良いが…

「さっきと、変わってねえ」この距離じゃ避けられねえし…

「仕方ねえ」

俺は腕が砕ける覚悟をし、両腕を頭の上に伸ばしゴーレムの両手を受け止める姿勢をした

真哉が構えた瞬間…

ドーンッ

ゴーレムが両手を振り落として爆音を鳴らし、辺りを砂煙で覆った

グオ？オ？オオオオ

ゴーレムが勝利の雄叫びをした

が…

「おいおい、まだ終わってねえよっ」

ゴーレムの腕から体が持ち上がり、凄い勢いで壁に叩き付けられた

ドゴーンッ

「まったく、未だに信じらんねえな…」

砂煙が消えていき…

「無傷なんてよ」

真哉が無傷で姿を現した

再生じゃなくて、身体能力だったみたいだな

「だがこの身体能力は、化け物の域を超えてるぞ」

振り落とされたゴーレムの両手の重さは感じなかったし、何よりも数十tはあるゴーレムを片手で投げれた

そして…

「2つ目の枷が何となくだが分かったぜ」

ゴーレムを見ると、左脇腹に赤い点が見える。て事はそこに何かがある筈

オオオオオオ

ゴーレムが立ち上がり、吠えながら真哉に向かって来た

やはり…

「岩の塊だからか移動スピードは遅いな」  
此方から…

（真哉！真哉大丈夫！？）  
なっ！

（シ、シルフィー！ど、どうしたんだ？）

（今、真哉が居る鉱山にゴーレムが現れたって、キャロル村で噂になってるから）

今、目の前にゴーレムが居るんだが…

（そ、そうか。なら急いで帰るよ）  
心配はこれ以上掛けたくない

（うん、分かった。気お付けて帰ってくるんだよ？）

（おう）

「ふう…悪いが、一気に片をつけさせて貰う」

ゴーレムは俺の殺気を感じたのか…

グオ？オ？オ？オオオオオオ

右腕に岩を集め…巨大な岩の針を作り、それを真哉に向かって放った

俺も…

「お前に合わせてやる！」

右手を固く握り、ゴーレムへ向かって跳んだ



オ？オ？オオオオオオ  
ゴーレムの岩の針と…

「うおおおおおお」  
真哉の右手がぶつかり…

ドーンツツ  
ぶつかった衝撃が凄く、辺りの砂や石、小さな岩を簡単に吹き飛ばした

オオオオオオオ  
「おおおお」

ピシッピシッ  
僅かに均等を保ったが、ゴーレムが押され始め、徐々にゴーレムの岩の針に亀裂が入っていき…

ガリガリツガリンツガラガラ…

遂には、真哉が岩の針を砕き…

「悪いが…」  
そのまま、右手をゴーレムの左脇腹に貫通させ、赤い玉を掴み…

これだな…  
「俺の勝ちだ！」  
一気に握り潰した

パリンッ

ガラスが割れる音がして…

ドゴンッ ドンッ ガラガラ… ゴーレムが崩れていった

## 23話（後書き）

読んで下さりありがとうございます。出来るだけ更新を頑張ります

## 24話（前書き）

少し短いです

## 24話

「ふう…終わった」

『お疲れ様です』

確か、まだ説明して貰って無かったな

「ああ。説明頼めるか？」

『大丈夫ですが、歩きながらの方が良いかと』

そう言えば、シルフィー達が待ってるんだった

「分かった」

俺が歩き始めると…

『では、何から話せば宜しいでしょうか？』

そうだなあ…

「先ずは、何故約束の事を知ってるのかを教えてください」

『分かりました。私が、約束の事を知ってるのは…胸の辺りを見て頂ければ分かります』

胸の辺り？

俺は確かめるが…

「？何も無いんだが…」

特に変わった様子は、無かった

『正確には、胸の中です』  
胸の中？

「まさか…」

俺が、この世界に来た原因の変な石か

『ええ、そのまさかです』

どうやら、本当らしいな。だが…

「俺達の声が聞こえるのなら、何故話し掛けてこなかったんだ？」

『それが、私が何度か話し掛けてもどうやら聞こえて無い見たいで…』

何度か話し掛けて来てくれたのに、何故聞こえなかったんだ？

「…何故分かるか？」

『いえ、全く分からないのです』

「そうか…」

俺にはよく分からんし、次の質問に行こう

「次の質問に行って良いか？」

『ええ』

次は…

「枷の事なんだが…枷って簡単に言えば、力を封じる物だろ？それが何故俺に付いてるんだ？」

大体封じられた覚えが無い…

『簡単に言えば、そうです。何故着いてるのかと言うと…私が付きました』

どうゆう事だ？

「何故俺に、枷を付ける必要があつたんだ？」

『それは…』

声の人物？が突然言うのを止めた

「どうした？」

いきなり止められると、少し怖いんだが…

『いえ。余りにも次元が違いすぎる話なので、言っても大丈夫なのかを迷ってしまつて』

そこまで、凄い話なのかよ…

「少し考えさせてくれ」

俺は歩みを止め、考えた

『ええ。どうぞ』

「悪いな」

『いえ。ゆっくり考えて下さい…少し助言をさせて頂きますが…』

「なんだ？」

どんな助言だろう？

『知らない方が幸せの事もあります』

確かに…

「ああ。参考にさせて頂く」

次元が違いすぎる話し…か。どんな事が聞けるのか興味心4割、逆

に恐怖心6割：これを聞いたら戻れ無い気がする…それが吹っ切れるかもな。あの声の人？も言ってたが、知らない方が幸せの事もあるって言ってたが、知らないと後悔する事もあるんだよねあ。ふう、決めた…

「待たせて悪い」

『大丈夫です。決まったのですか？』

「ああ。話を…聞かせてくれ」

どうせ、後々分かって来る事だろうし、何より、後から分かる方が怖いしな

『宜しいのですか？』

「ああ。頼む」

気が変わらない内にな

『はい、分かりました。では、何故貴方に枷を付けたかと言つと…』

迷ってたのに、話してくれてんだ。俺も覚悟を決めよう

『貴方が不安定だからです』

「へっ？」

それだけ？

俺は拍子抜けし、変な声を出してしまった

『勿論、これだけなら問題はありませんが…』



まだ続きがあるのか…あれで終わってたら、俺の覚悟が無駄になるとこだった

『貴方自身に問題があるのです』

俺自身に？

「俺が不安定だと、何か不味いのか？」

『ええ。下手をすれば…この世界が終わります』

どうゆう事だ？世界の事は分かったが…

「何故俺が不安定だと、世界が終わるんだ？」

『それは、貴方がこの世界と同じ存在…いえ。もしかしたらそれ以上かもしれません』

世界と同等…か。本当に次元が違いすぎる話だな

『もし貴方が怒りを感じるなら、それは世界の怒りと同じです』

そうなのか…そう言えば…「俺、盗賊に怒った覚えがあるんだが…」

『ええ。あの時は流石に私も冷や汗を掻きました』

と言う事は…

「まさか…」

世界の何処かが…

『いえ、貴方が心配する事は起きてませんから大丈夫です。怒った時間が短かったので、何とか私が抑える事が出来ました』

良かった。それと…

「悪いな。そんな事が起きてたなんて…」  
知らなかった。と言おうとしたが…

『いえ。知らなかったのは、仕方の無い事ですので、お気になさらずに大丈夫ですよ』

俺の言葉を遮り励ましてくれた

『それに…謝るのは私の方です』

「どうしてだ？」

何もされた覚えが無いし、寧ろ助けてくれたから、感謝をしたい位なんだが…

『貴方をこの世界へと連れて来てしまいました』

その事が…

「確かに、この世界へと連れて来られたが、別にこの世界が嫌いな訳じゃないぜ？」

シルフィーの話で嫌な部分は出てきたが、この世界自体は嫌いじゃない。寧ろ俺は好きだ

『私に怒りを感じないのですか？』

「ああ」

この人？は自分に責任を感じてるんだな

『何故ですか？私は、貴方から大切な生活を奪ったのですよ？』

うーん、大分自分を責めてるな…

「確かに二度と元の世界には、帰れないかもしれない。だが俺は決めたんだ…自分の道は自分で決め、この世界で頑張ると」

『そうですか…』

「納得してくれたか？」

『はい…貴方に会えたのは、運命だったのかもしれないね』

運命…か

「そうかもな」

『私は、貴方を応援します。いつかきつと幸せにますようにと』

俺を気遣ってくれる奴等が居るって事は、もう幸せなのかもな。

「ああ、ありがとう」

もう少しで、出口だな

『それと、枷…外し……た』  
声が聞こえ辛い

「何て言っただ？」

『も…時間…様…』

「待ってくれ、まだ聞きたい事が…」  
聞こえないか

「後でまた、話そうな」

「…」

一瞬声が聞こえた気がした  
そして、俺は鉾山の中から出た

## 24話（後書き）

総合評価が500を越えました。評価して下さい。皆様本当にありがとうございます。これからも、頑張って投稿します。

## 25話（前書き）

書き方が上手くなっていれば良いのですが、中々難しい

## 25話

「うつ、眩し」

俺が鉾山から出ると…

「クロさん！」

誰かが驚きの声を上げ、近づいて来た

ん？リュウか

「大丈夫ですか！？、怪我はありませんか！？」

「ええ、大丈夫ですから落ち着いて下さい」

心配してくれてたんだな

「良かった…これが落ち着いていられますか！僕はクロさんに何かあつたんじゃないかと…」

心配してくれたのは、ありがたいんだが…長くなりそうだし、話を換えよう

「え、えーと、テツさんは何処に？」

「クロさんは僕の話聞いてるんですか！？まあテツさんなら、キヤロル村へ行きましたけど」

一様答えてくれるんだな

「そうですか…では、自分達もキヤロル村へ行きましょう」

テツさんに殴られそうだけど、行かないとな

「ですから僕の話聞いてるんですか!？」

「歩きながら、聞きますよ」心配を掛けた訳だし、聞かない訳には行かないよなあ

俺はキャロル村へ向かって歩き始めた…

「あつ、待って下さい」

リュウと一瞬に

30分後…

「ですから、ギルドに入る時は、気お付けて下さい」

「は、はい」

は、話が長い。リュウがどれだけ心配したのかを散々聞かされたと思つたら、急にギルドの話になって、何故かリュウの愚痴や、注意事項を説明された

「あつ、着きましたよ」

やつとか…

「はあ」

「何か、疲れてませんか？」

「いえ、大丈夫ですよ」

お前の仕業だと、言いたい

「そうですね…テツさんはギルドに居ますよ」

ギルドは気になるが…



「何で、ギルドに居るって分かるんだ？」

「テツさんが、そう言っていました」

成る程：

「何でリュウは一緒に行かなかったんだ？」

「僕も行こうとしたんですが、テツさんに待ってる様に言われて」

そうか：

「取り敢えずギルドに行こう」

「分かりました。ギルドはこっちです」

リュウは、キャロル村の中心に向かって行った

「リュウが居て助かったぜ」俺1人じゃ迷ってたな

「どうしたんですか？」

考えて止まってたみたいだな

「いえ、何でもありません。行きましょう」

「はい」

リュウは先頭を歩き、俺はリュウの後を付いていった何か村の皆が慌てている様な気が：

「クロさん、着きましたよ」

「あつ、はい」

結構でかいな。学校の体育館位あるんじゃないか

俺が扉を開けると…

「今すぐ王宮に知らせろ！お前らは村の皆を避難させ、皆を守れ！」

「分かりました！」

ギルドの中は、怒号が飛び交っていた

「い、一体、何が起こってるんですか！？」

俺には分からんが…

「取り敢えず此処に居たら、邪魔になる。一旦外に出よう」

「えっ？」

何を不思議に… あつ、敬語忘れた。もう良いや…

「ほら、早く外に出るぞ？」

「あつ、はい」

俺達は外に出た…

「此処までくれば、大丈夫だな」

「それが、クロさんの素なんですね？」

「まあ、な」

だけどやっぱり、こつちの方が楽だ

「クロさんは、何で敬語を？」

うーん…

「特に理由は無いが、強いて言うなら…癖かな。まあ癖でも、年下には使わないけどな」

「そうですか」

俺も聞いてみるか…

「リュウは何で、冒険者をやってるんだ？」

「ぼ、僕ですか！？」

「そんなに、驚く事無いだろ？」

質問が変だったか？

「いえ、聞かれた事がなかったので」

普通は聞かれないからな

「まあ、何でか聞いて良いか？」

「ええ、良いですよ…僕は施設で育ったんですよ」

リュウは、何処か遠い目をしながら言った

！

「わ、悪い。そうとも知らずに聞いちゃって…もう聞かない」  
俺はリュウに謝った

「いえ、大丈夫ですよ…最後まで僕の話聞いてくれますか？」

「聞いても良いのか？」

そんな簡単な話しじゃない筈だが…

「クロさんだからこそ、話したいんですよ」

「そ、そうか…じゃあ頼む」 随分信頼されてるな

「はい…僕は施設で育ち、院長や、同じ施設で育った人達と暮らしてたんですが、施設の経営が苦しくなってきた…」

そんな事が…

「それで、リュウが冒険者になり、金を稼ごうとしたのか」

「はい…ですけど、少しも上手く出来なくて…僕に冒険者は向いて無いんですかね？」

うーん…

「まだ経験が無いからだと思うぞ？誰だって、これをやれと言われて一回で出来る奴は少ないしな」

「そうなんでしょうか？」

簡単に納得は出来ないよなあ…

「まあ、まだ諦めるのは早いって事さ…それにリュウは、誰かに頼る事を知った方が良いぞ？」

施設だってそうだ。リュウが冒険者にならなくても、皆で頑張れば何とか出来たかも知れないしな

「どうゆう事ですか？」

「俺みたいに、誰かを頼れば1人じゃ出来なくても、協力すれば出

来る事もある」

俺は、リュウの腰に付いてる袋を指差した

「そう言えば…そう、ですね」

「なっ？もう少し頑張って見ても遅くは無いだろ？」

「はい、ありがとうございます」

吹っ切れた様だな

「それで、相談があるんですが…」

「無理難題じゃければ聞くぞ？」

「えーと、その…」

まさか…マジで無理難題！？

「また頼つても良いですか？」

何だよ。そんな事が…

「ああ、良いぜ何時でも頼りな」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

先ずは第一歩って所かな

「あっ、テツさん」

うん？本当にテツさんだけど、何かやつれてないか？

「リュウか、隣の奴は誰だ？クロに似てるが…」

テツさん本当に大丈夫か？

「何言ってるんですか、本物のクロさんですよ」

「ク、ロ…クロ！？本当にクロなのか!？」

「ええ。本物ですよ」

俺は少し苦笑いしながら答えた

「その声は、クロだな…」

テツは突然顔を下に向け、真哉に近づいて行った

何か、怖いんだが…やっぱり殴られるのかなあ

「クロ…」

「な、何ですか？」

俺は体に力を入れながら答えた

「すまなかった！」

テツは凄い勢いで頭を下げた

な、何で頭を下げてんの!？

「あ、頭を上げて下さいよ」

「それは出来ねえ。俺は…俺は、自分自身が情けなくてクロに合わせる顔がねえんだ」

情けなくて？

「どうゆう事ですか？」

「俺は、クロやリュウを危険な目に遭わしちまった。俺がもっと警戒してれば、あんな事には…」

その事が…

「ぼ、僕は大丈夫ですから…クロさんも、そうですよね？」

先に言われたか…

「ええ。リュウの言う通りです。それに生きて帰って来れたんですから、自分は気にしてませんよ？」

「だが、それじゃあ俺の気がすまねえんだ」

納得しろよ。まったく…

「それじゃあ、貸しって事で、どうですか？」

「貸し？」

「ええ。自分達が困ってたりしたら、助けると言う事です」

「成る程…それで、クロ達が納得するなら良いが…」

俺は提案した張本人だし…「自分は大丈夫ですよ」

「僕も大丈夫です」

「そうか…分かった。じゃあ困った事があつたら何時でも言うてくれ」

ふう、やつとか…

「ええ」「はい」

「それじゃあ、俺は行く所があるから行くが、他に聞きたい事とかあるか？」

うーん、そう言えば…

「ギルドの中で、何が起きてるんですか？」

「それは、ゴーレムが出たからだ。それで、今王宮に王国騎士団を派遣して貰う様に要請をしてんだ」

「お、王国騎士団！？」

「リュウ、いきなり大声出すなよ」

そこまで驚く事なのか？

「す、すいません。で、でも王国騎士団ですよ」

いや、俺に言われても王国騎士団なんて知らねえしな「そんなに凄いのか？」

「クロ、お前王国騎士団を知らないのか？」

テツは若干呆れた様子で言った

何て言えば…

「ええ。色々とあつて…」

これ、大丈夫か？

「まあ良い。王国騎士団つてのは、王国最後の砦と言われる程の実



力者達だ…」

成る程、王国つて位だからかなり面積が多い筈、最後の砦つて事は相当強いんだな…ちよつと待てよ…

「ゴーレムつてそんなに強いんですか？」

「当たり前だろ、大きさによつて強さは違うが、あの大きさだと…SSに近いSランクつて所だ」

え、SS！かなり強っ！だけどそれを倒した俺つて…

「どうした？急に落ち込んで？」

「いえ、大丈夫です」

段々規格外になつてきてる

「でも、何師団が来るんですかね」

リュウは、興味津々だな

「さあな、今要請はしたが、王国騎士団が来るかは…」  
うおおおおお！！！！

うるさっ！

「ど、どうしたんですか！？」

「どうやら、王国騎士団が来る様だな」

ドンッ！

ギルドの扉が凄い勢いで開き…

「テッ！」

ガタイの良い、無精髭を生やした30代の男が出てきただ、誰？

「どうした、ドレク」

「凄えぞテツ、今連絡があつて第3師団が来るつてよ」

「第3師団が！？」

何個師団があるんだよ…

「なあリュウ、師団つて何個あるんだ…」

俺は小声でリュウに質問した

「確か…第9師団まであつた筈です」

多い、のか？

「そうか…第3師団つて強いのか？」

「かなり強いですよ。第1師団が1番強いですが、それでも3番目に強いです」

成る程、強い順になつてゐるつて事か

「そんじゃあまた何かあつたら、聞かせてくれ」

「おう」

話が終わった様だな

「あの人は誰ですか？」

先に言われたよ。まあ良いか…

「あいつは、ドレクって言って、此処キャロル村のギルドの支部長をやってんだよ」

「そうなんですか…」

「質問は、もう無いか？」

俺は無いな…

「ええ。自分は、大丈夫です」

「僕も大丈夫です」

「そうか…そんなじゃあ困った時は何時でも言ってくれよ？」

「はい」

「分かりました」

テツは走って何処かへ行った

もう夕暮れだな…そろそろセルードさんの所に行くか…

「リュウは、これからどうすんだ？」

「えーと、クエストに必要な物が手に入ったので、今日は宿で寝て明日リローン街へ向かいます」

リローン街って俺が行く所だった筈…

「なら一緒に行かないか？」

「えっ？良いんですか？」

「ああ、一緒に行こう。もう1人居るけどな」  
セルードさんに、言っとこう

「ありがとうございます。じゃあ明日出入口で待ってます。お休みなさい」

「あつ、おい」

行動が早えな。それに時間決めて無いんだが…まあ、出来るだけ早く起きて、出入口に向かおう

俺はそんな事を考えながら、セルードさんが待つエルダーの宿へ向かった

## 25話（後書き）

本格的に忙しくなってきたので、もしかしたら更新が出来なくなる  
かもしれません

## 26話（前書き）

いきなりですが、この小説書くのを止めます。あまりに酷いので、  
つと腕を上げてから1から書き直します。応援して下さい。皆様本  
当にすいません

## 26話

エルダーの宿に着いたけど…

「何か、此処まで来るのに長かったなあ」

「あつ、真哉だ。お帰り」シルフィーは、手を振りながら真哉に近づいて行った

うん？シルフィーか

「おう。ただいま」

あつ、そう言えば美味しい物食いに行くんだった

「それじゃあ、行くか？」

「何処に？」

忘れたのか？

「美味しい物、食いに行かないのか？」

「今日はいいいよ…真哉は疲れてるでしょ？」

まあ色んな意味で疲れてるが…

「だけど…」

「美味しい物はリローン街に行ったら食べようよ、ね？」

うーん…

「分かった…悪いな」

「大丈夫だよ。今日はゆっくり休んで」

「分かった」

シルフィーはそう言い残すと首飾りになった

俺、シルフィーにまた気を使わせちまったな…

「シロも悪いな。美味しい物食いに行けなくて」

キューイ

シロは首を横に振った

「ありがとうな。じゃあ中に行くか」

キューイ

俺は首飾りを身に付け、シロを頭に乗せてエルダーの宿に入った

エルダーの宿に入ると…

ガヤガヤガヤ

へえ、此処の宿って結構人気なんだな

「それより、セルードさんは…」

おっ、あれか…

入って宿の奥の方にセルードは座っていて、真哉に気づいたセルードは手で真哉を招いた

「セルードさん、すいません。遅くなっちゃって」



俺はセルードさんに頭を下げた

「いえいえ、無事に帰ってこられて何よりです。頭を上げて下さい」

「はい」

「まずは座って、ご飯を食べましょう」

「分かりました」

俺は木製の椅子を引き、座った

「どれにしますか？」

どれって言われても、俺この世界の料理を知らないし…

「え、えーと…じゃあセルードさんと同じ物で」

ナイスッ俺！

「分かりました」

チリーン

セルードは、丸い木製のテーブルにあったベルを鳴らした瞬間…

「ッ！」

殺気！

「そこか」

俺はすぐに殺気の出所を見つけ、飛んできた3つのナイフを掴み…

「動くな」

殺気を出してた奴の後ろに回り込み、首にナイフをそっと当てた

「何っ！」

うん？声が高い様な…

「そこまで、ですよ。エルダー」

「はあ、そうみたいだな」

エルダーは両手を上げた

「で、どうでした？」

どうゆう事？

「その前に…ナイフをどけて貰えるか？」

あっ…

「すいません」

俺はナイフをどけて、少し離れ警戒した

「そんなに警戒するなって」エルダーは苦笑いしながら言った

うーん、まっ、今は敵意も殺気も感じ無いし良いか…

「はい」

俺は警戒を解き、体の力を抜いた

「結果から言うと…私の想像以上だな」

「そうですか」

2人は何の話をしてるんだ？

「真哉さん、すいません」

「な、何で、セルードさんが謝るんですか!？」

余計に分からないんだが…

「私が説明するよ」

まあ、俺は分かれば良い訳だし…

「お願いします」

「まず、セルードと私は元パーティーの一員だったんだ…」

「パーティー？」

何だそれ？

「パーティーとは、2人以上から作れるもので…」

「簡単に言えば、仲の良い奴と組んで協力するって事だ」

セルードの話を遮り、エルダーが説明した

成る程…

「あの、私が喋っていたんですが？」

「あんたのは、話が長くなるんだよ」

このままじゃ、喧嘩になりそうだな…

「あの、説明の続きを…」

「そうだった。悪い…それで、パーティー解散後初めて私の宿に来たから、話をしたら…」

あー、それで…

「自分の話が出てきたと?」

「そうゆう事さ」

成る程…

「セルードさんは、エルダーさんに何て話したんですか?」

「え、えーと…2つ名位強いと…」

セルードは焦りながら言った

「はあ!? 何でそんな事を…」

まったく、確証も無いと言つのに

「だが、事実あんたは、2つ名クラス確実だよ」

「えっ?」

何で分かるの?

「エルダーがそう言うならそうですよ。エルダーはギルドランクはAですが、2つ名クラスと同等の強さを持ちますから」

「ええっ!?!」

強っ!

「しかし、私の殺気や攻撃を一瞬で見切るとはね…それにあの速さ、私が戦ったどんな2つ名よりも強いよ」

何と言うか、こつはつきり言われると照れるな

「あ、ありがとうございます」

「エルダーにここまで言わせるとは、真哉さんは、本当に凄いお人だ」

「セルードさんもありがとうございます」

この強さは化け物だけど、褒められるとやはり嬉しい

「よしっ、今日は気分が良いから、私がおごってあげよう。好きな物頼みな」

「それは有難いんですが、今日は疲れてしまつて…すみませんが今日は遠慮します」

「そうかい…なら少し待つてな」

エルダーはそう言い宿の奥に行った

「え、えーと、怒らせてしまいましたか？」

「大丈夫ですよ、エルダーはあの位では怒りませんよ。」  
「そう言われても…」

「そうなんでしょうか？」  
不安だよなあ、せっかくエルダーさんの気分が上がったのに俺のせいで、落としたからなあ

「はい。それに待つてれば分かりますから」

確かに…

「分かりました」

俺等が話した少し後にエルダーが来た

「待たせたね。ほらこれを持っていきな…それとあんたの部屋は二階の奥だよ」

「ありがとうございます」  
バスケット？

エルダーが渡したのは、大きめのバスケットだった

「いくら疲れてても、少しは食べときな」

そうゆう事が…

「すいません…では先に失礼します」

「ああ。ゆつくり休みな」

「真哉さん。お休みなさい」

「はい。お休みなさい」

俺は階段を上がり、奥に向かった

部屋に着いて…

「へえ、結構広いんだな」 8畳位か？ベッドが右側に2つあって、左側にダンスやクローゼットか

キュー

「シロ、あまり暴れ過ぎるなよ」  
キュー

（シルフィーも外に出たらどうだ？今なら、近くに人は居ないし）

（じゃあ、そうする）

シルフィーが答えた後首飾りが光り、小さい妖精に変わった

「それじゃあ、これを先に食べててくれ」

俺はエルダーさんに貰ったバスケットをシルフィー、シロの目の前に置いた

「真哉は？」「俺は疲れたから…」

「駄目なんだよ。しっかり食べないと」  
キューイ

「わ、分かったよ」

俺は2人？に言われて、バスケットの手前に座った

「はい」

「ああ、ありがとう」

うん？バスケットの中身はサンドイッチだったのか

「それじゃあ、いただきます」

「いただきますーす」  
キューイ

「…美味しいな」

明日エルダーさんにお礼を言っとこう

俺は3つ程サンドイッチを食べ…

「じゃあ俺は寝る。後は全部食べてくれ」

「分かったよ」

キュイ

返事を聞いてから、ベッドで眠りについた

「此処は？」

白い空間？

真哉は、辺り一面真っ白の空間に浮かんでいた

何だ、これ？夢か？『また、会えましたね』

「その声は…」

俺は声のした方に振り返ると…

正に女神と言う名に相応しい女性の人が居た

「…凄い」

凄い、の一言では表せないが今はこの言葉しか思いつかない

『ふふっ、ありがとうございます』

… あっ、そうだ

「いえいえ。所で、此処は？」



『此処は、あの世界…ディアルとは別の空間です。そして私が唯一存在する事が出来る場所です』

あの世界はディアルって言うのか…此処がディアルとは違ってたのは分かったんだが…

「唯一？」

『はい。私はディアルで創造神として存在しているのですが…』

「ま、待て待て」

そ、創造神？

「俺って、もしかして凄い存在と話してるのか？」俺は小声で呟いたが…

『いえ、貴方様の方が、私よりも存在が上ですよ』

貴方様って…

「その、様は止めてくれ。真哉って呼んでくれないか？」

「それは出来ません。私は貴方様より下の存在なのですから…」

はあ、下とか上とか関係無いだろ

「様とか言われると、違和感があるんだよ」

『で、ですが…』

「頼む」

「…分かりました。真哉がそこまで言うのであれば、そうします」

「ありがとう」

## 26話（後書き）

中途半端ですが終わりです。1週間経ったら消します  
急で本当にすいません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7773t/>

---

高校生の異世界生活

2011年10月6日18時06分発行